

---

# デジモンメモリーズ

パラレル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デジモンメモリーズ

### 【Nコード】

N3295T

### 【作者名】

パラレル

### 【あらすじ】

デジタルワールドに潜む悪に立ち向かうために少年少女とデジモンの冒険が始まる。

この小説は独自の設定やオリジナルのデジモンが出てきます。そういうのが嫌いな方にはオススメできません。

## プロローグ（前書き）

はじめまして。 初投稿です。 初心者なので駄文ですが、ご了承ください。 不定期に更新することになると思います。 すいません。 少しでも楽しんで頂けると幸いです。

## プロローグ

闇の中、影を内包した結晶から声が漏れる。

「もう少しだ……。もう少しで我は復活する。我が計画を阻み、我を倒した輩ももういない。直に復讐できないのは残念だが、より事が運びやすくなるとも考えられる。完全復活までの間、この障気を使って侵略を進めるか……。そしてデジタルワールドを我が物に……」

そして、結晶の中の影から静かに黒い障気が滲み出してきた……。

「ここまで来れば大丈夫だろうね」

「時間がありません。早く始めましょう」

巨大なマシーン型デジモンと獣のような智天使型デジモンが木々が茂る森で話し合っていた。何かに追われていたようだ。

「見つけたか？」

「いや、そっちはどうだ？」

追っ手らしき者の声が聞こえる。

「ちゃんと持って来たよ。四つのデジタマ」

「これに私たちの力を注ぎ込むのです」

「わかった」

二体は四つのデジタマに自らの力を注ぎ始めた。

「いたぞ」

その声と共に大量のデジモンが二体に襲って来た。デジモン達の目は怪しく光っている。何者かに操られているかのようだ。

「急いでください。」

「もう急いでるよ。そつちも頑張つてよ。」

身動きが取れない二体に、デジモン達が襲い来る。

「うわゝ、この大群はきついよ。」

「ごちゃごちゃ言つてないでさつさと終わらせてなんとかしないと

……。あ、しまった。」

四つのデジタマの内一つが衝撃で遠くへ飛んでいく。

「とりあえず、残り三つのデジタマだけでも守り切らないと。」

二体は、デジタマを守りながら大群から逃げる。が、崖に追い込まれる。

「力をデジタマに注いでたから、戦える程力残つてないよ。」

「というか、もう限界ですね……。」

そして、二体のデジモンは少しずつ小さく姿を変えながら崖から川へと落ちて行った。三つのデジタマを抱えたまま……。

## プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。これからよろしく  
お願いします。

## 第一話 「異界への扉」 (前書き)

第一話です。でも、まだデジモンは出てきません。

## 第一話 「異界への扉」

気持ちの良いくらい澄み切った青空。そんな空を一羽の鳩が飛んでいく。

乳白色の塊を一つ程落として……。

鳩が落とした乳白色の塊、要するに糞は、真下を歩く中学生くらいの栗色の髪の少年の頭目掛けて落下していく。

すると、少年は予測していたかのように進行方向を斜め右にずらして、綺麗に糞を避けた。

避けたのだが、避けた方向、つまり右側の前方に建っていた電柱に頭部をぶつけ、目眩を起こしてふらつき尻餅を着いた。

そして、尻餅を着いたときに「ぬちゃ」という気色の悪い音と気色の悪い感触を感じてしまった。

鳩では無く、犬の糞を下敷きにしてしまったのである。

さらに、そのことに驚き跳び上がったときに前方から歩いてきた男性の腹部に頭突きをかましてしまった。

その男性というのが、如何にも ○○組（土木関係でない方）に所属していらっしやるような方で、身の危険を感じた少年は全力で逃走した。

当然、ヤ○ザ関係であろう男性も追いかけて来て、ビビりまくった少年は橋から川へダイブして 逃げ延びたのだった……。

「 うう、寒い」

川から上がった少年「刃坊 巧」（じんぼう たくみ）は呟いた。

さっきの出来事から分かるように彼、巧は運というものが無に等しいのである。

「昨日は帰り道で、野球少年にホームランボールを腹に直撃されるし、一昨日はすっぽ抜けたバットを当てられそうになったし。……さすがにバットは避けただけ。はあ……、なんかもう嫌だなー」

巧がそう呟いていると、二つの人影が近づいて来た。

「タクパンマン、新しい制服だよー」

「人を、自らの顔を引きちぎって子供達に与えるスーパーヒーローみたいな言うな、葉月」

「制服いらなのー？」

「……すいません、調子乗ってました」

普通は持つてないであろう男子の制服（新品。巧の身長にもぴったり合っている。）を掲げながら現れたのは、オレンジ色の髪の少女、金城葉月だった。

「さしずめ、空から落ちて来た鳩の糞を避けたら、前方にあった電柱に激突して、よろめいて尻餅を着いたところに犬の糞があって、驚いて跳び上がったらヤ○ザの人に頭突きを浴びせて逃げて、勢い余って川に飛び込んだ。というところかな」

「……さすが天才、充様。気色悪いほど正確な答えありがとう。」

正解だよ、チクショー」

「いや、照れるな」

「皮肉を込めて言っただつもりなんだけど……」

巧の皮肉を軽く受け流したのは、身長が十センチ程巧より高い黒髪の少年、金城充だった。

もうお分かりかと思うが、葉月と充は兄弟である。

合流した二人、充と葉月の金城兄妹と雑談を交えながら、巧は自分達を通う光山中学校へと歩を進めた。

中学校に入った三人を待ち受けていたのは、金城兄妹のファンクラブの大群だった。

「……さすが、男子バスケット部キャプテン兼現生徒会長とテニス部エース兼次期生徒会長。今年の総体も期待されてるらしいし、スターは人気が違うわ」

「巧、何言ってるの。いつもより結構少ないくらいじゃない」  
「葉月、俺から見たらやっぱり大群にしか見えねえよ。とりあえず、身の危険を感じたから非難するわ……ぶへっ」

大群にぶつからないように巧は回避を開始したが、大群から勢い良く飛び出した二つの人影に突進を食らい、数メートル程飛ばされてしまった。

飛び出した二人、男子と女子は双子なのだろうか。背丈もほぼ同じで、顔付きもよく似ていた。髪の色も同じ金髪だったが、片方はこめかみの辺りまでの長さで、もう片方は腰に少しかかるくらいの長さだった。

「葉月先輩！」

「……充先輩」

「「これ、受け取ってください」」

「わあ、ありがとう」

「一体、何だろう？」

双子は勿論、葉月と充も吹っ飛ばされた巧のことは余り気にしていないようだった。

「日曜に二人でクッキー作ったんですよ」

「食べてくれると……嬉しいです」

「コラア、一也、三葉！ 人吹っ飛ばしといて、何も無かったかのように進めるな」

「葉月先輩の近くにいたあんたが悪いんだろうが」

「これ以上充先輩に近づいたら……刺す」

「え、俺のせい？ というか、三葉はナイフをこっちに向けな」

「そつだぞ三葉。学校にナイフを持ち込むのは校則違反だ。包丁なら良いが」

「いや、それ以前の問題だろ。てか、包丁だったら良いのか？」

「……わかりました」

「……一也、三葉。お前らには、先輩を敬う心つてのはないのか？」

「あんたに向ける分は全て葉月先輩に回した！」

「……あんただって充先輩にタメ口使ってる。……あんたと葉月先輩は二年で充先輩は三年なのに、…… やっぱり刺す！」

「三葉はナイフをこっちに向けるなあ！」

「巧、取り込んでるところを悪いが、放課後お前のPC貸してくれないか？」

「別に良いけど……」

「で、何で葉月と三条の双子共まで俺ん家に来てんだ？」

「あれ、巧に言って無かったっけ。生徒会活動に使う資料探しに使うってこと」

「そつだったけな。じゃあ、葉月がいるのは納得できる。で、尊敬のカケラも無いその双子は何しに来た？」

「いや、俺達も生徒会役員だから。俺が会計で」

「……あたしが書記」

「そつだったけ？スマン。でも、敬語くらい使ってくれないか？」

「あんたに使うような敬語なんかねーよ」

「……右に同じ」

「……だろうな！」

「雑談は良いから、PCの準備してくれ、巧」

「……わかったよ。やりゃあ良いんだろうがよー！」

いそいそとPCの準備に取り掛かった巧の背中がやけに小さく見

えた。

「あいつ、どうしたんだ」

「拗ねてるんじゃない？」

「おい、準備出来たぞ」

そう言った巧の声は まだ立ち直れていないことを感じさせた。

「ああ、ありがとう。ん、何か様子がおかしいぞ」

充の言った通り、巧が準備したPCは、不規則な機械音を流しながら、画面に目まぐるしく何色もの色を映し出していた。

「おかしいな、さっきはこんなじゃなかったのに」

「あんた、本当にちゃんと準備したのかよ」

「した筈んだけど……、あれ、何だろこの扉みたいなアイコン」  
目まぐるしく変わる画面上でただ一つだけ、扉の形をしたアイコンだけが画面の中央に変わらずあった。

「何だろうねー、カチツと」

巧の横から乱入してきた葉月は扉のアイコンをクリックしてしま  
った。

「あ、こら勝手にクリックするなよ」

すると扉のアイコンが二回りほど大きくなって、扉が開いた。そ  
の中から漏れた光を見た五人は全員気を失ってしまった。

そして、五人の体は次第に透けていき、しばらくして完全に消え  
てしまった……………

第一話 「異界への扉」 (後書き)

読んで頂いてありがとうございます。次話も読んで頂けると有り難いです。

## 第二話 「未知との遭遇」(前書き)

第二話です。

かなり長いです。

…… ちょっとわかりにくいかもしれません。

## 第二話 「未知との遭遇」

「うう、何が起きたんだ？ ……っっていうかここ何処だ？」

巧は少し呻きながら起き上がり、呟いた。

巧の発言から分かる通り、そこは巧の家ではなかった。

なぜか巧は森の中にいたのである。

「ここ何処なんだよ。おい、葉月、充、一也、三葉、大丈夫か？」  
「うーん」

「一体、何が起こったんだ」

「痛てて……」

「……ここ何処？」

どうやら、巧以外の四人も無事なようだった。

「確か、PCの画面に映った扉の中から漏れた光を見て……あれ、  
そこから先の記憶がない」

巧がそう言うと、全員が頷いた。

「……駄目だ。圏外だ」

充は携帯を閉じ、溜息を着いた。

「こんなところでじっとしてても仕方ないし、とりあえず探索して  
みよーよ」

「俺は先輩に付いて行きます」

「おい、ちよっと待てよ。……仕方ない、行くか。」

「そうだね、葉月の言うことも一利有るし」

「……充先輩が行くなら、私も」  
一先ず五人は森を歩き始めた。

歩き始めてからしばらくして……

「ん、何かあるぞ」

「本当だー、何だろー」

五人が見つけたのは、両手で抱えられるほどの三つのタマゴとぬいぐるみのようなもの二つだった。

ぬいぐるみのほうは、二つとも長い耳が垂れ下がった犬のようなうさぎのようなもので、片方は全体的に白色で所々に緑色のラインが入っていて、もう片方は茶色にピンクのラインが入っていた。

「……息、してる!」

「本当だ、じゃあ生きてるのか。だったら、手当てしないと」

三葉と一也はそれぞれ、茶色と白色の謎の生物の手当てを始めた。

「……何だろう、初めてあいつら二人がまともに見えた気がする」

「巧にだけはかなり当たりが強かったもんな」

「二人もぼーっとしてないで手伝おーよ」

「すみません!」

「呼吸も落ち着いたようだし、少し様子を見よう。三葉、お願い  
いできるかな」

「……わかりました」

「一也くんも様子見といってくれる?」

「勿論です、葉月先輩」

「あの二匹のことはあの二人に任せるとして、このタマゴ三つ  
はどうするよ」

「多分、あの二匹に似た生物のタマゴなんだろうな。僕は食用にするのは反対だな」

「充……お前、食うつもりだったのか?」

「場合によっては」

「で、結局どーすんの?」

「うーん、とりあえず二人のところまで運んでおこう。あの二匹が目覚めたら何か分かるかもしれないし」

「そうだな。じゃあ俺はこの赤い渦巻きのタマゴを運ぶ」

「じゃあ、私は何となーく緑の渦巻きのにしよーっと」

「じゃあ、僕は青い渦巻きか……」

三人は、それぞれ選んだタマゴに手をかけた。

すると、タマゴは手が触れた瞬間に輝き出した。

「何だ、これは」

「一体……」

「何が起こってるのー？」

そして、突然三つのタマゴから何かが飛び出した。

「『痛つて』」

巧が選んだタマゴから飛び出した影は正面にいた巧に激突した。

巧に激突したのは巧の腰ほどの大きさの紅色の蜥蜴とかけだった。その

蜥蜴は頭の後方から三本の角が伸び、両肩から飛び出た突起から両手首にかけて黒いラインが入っていた。

『痛つて、俺はリオモン。よろしくな』

「痛つて、ああ、俺は刃坊巧。こっちこそよろしく。……つて喋つた！」

『何だよ、喋つちや悪いのかよ』

「……いや、悪くはないけど」

『オイラ、ガルモン。よろしく』

「僕は金城充。こちらこそよろしく」

『アタシ、ピクシモン。よろしくね。』

「私は金城葉月。こちらこそよろしくー。」

充と自己紹介し合っていたガルモンは、リオモンと同じくらいの

大きさを、二足歩行で腰に二丁のピストルを携えた 白と薄い水色の毛の犬のような生物だった。

葉月と自己紹介し合っていたピクシモンは、リオモン達より少し背が高いくらいの大きさで、妖精のピクシーに似た姿の少女だった。

「何でお前らは謎の生物が日本語喋ったのに少しも驚かないんだ？」

「こんな謎に満ちた世界じゃ、別にガルモン達が日本語喋ってもおかしくないだろ」

「ピクシモンはあんまり違和感が無いからかなー」

「……納得」

「一也、三葉、そっちはどうだ」

「いや、まだ意識が戻らねーんだ。尊敬するのに値しないクソ先輩。

……って、何ですか、そいつら？」

「やっつと、敬語使ってくれたか」

「……質問に答える」

「……すいません。だから、三葉さんは包丁をこっちに向けないでください。えっと、こいつらは……」

『俺達はそのくらいでもこいつらでもないよ！俺はリオモン』

『オイラはガルモン』

『あたしはピクシモン』

「……だそうだ」

『うーん、頭がぼーつとするよ』

『気絶してたようですね。体の節々が痛みます』

「あ、今起きたか。てか、やっぱりこの二匹も喋るんだな」

「……そうみたい」

『助けてくれたんだね。』 ありがと、僕、テリアモン』

『恩に着ます。 私はロップモンと言います』

「俺は三条一也だ」

「……三条三葉」

「 さて、全員が揃ったところで、テリアモンとロップモンに聞くけど、ここは何処で、君達は一体何なんだ？」

『私達はデジタルモンスターという生物です。略してデジモンとも言います』

『そ〜そ〜』

『それで、この世界はデジタルワールドという世界なんです』

『そ〜そ〜』

『ちなみに、ここはプロセス大陸にあるグローブフォレストという森です。ここを抜けたら、ミドルタウンという町が見えるので、そこに向かうと良いと思います』

『そ〜そ〜。』

「デジモンにデジタルワールドね。ということは多分僕達はあの扉からこの世界に入ったんだらうね」

「どうでもいいことですけど、テリアモンは『そ〜そ〜』としか言っただけじゃないですか？」

『そ〜そ〜』

「はいはい、 みんな、何か来る!」

『シャドウシックル』

スパパッ

長年不幸に付き纏われていたからか、いち早く危機を察知した巧によって、全員が回避できた。

しかし、彼らがいた地点に生えていた木は同じ方向に切り倒されていた。

「何なのよー、一体」

「あの蟻螂がやったようだね」

充が指差した方向には、金属製の鎌を持った巨大な蟻螂が飛んでいた。

『スナイモン、成熟期の昆虫型デジモンです』

「……………成熟期？」

『デジモンには、生まれたばかりの幼年期、少し成長した成長期、更に成長した成熟期という風に成長の段階があるんです』

「ということは、リオモン達、三匹は幼年期なのか？」

『いや、俺達は成長期だ』

「例外もあるのかな？」

『詳しくはわかりませんが、そうなんだと思います』

『のんびり話してる場合じゃないよ』

スナイモンはあの一撃だけで攻撃を止めた訳ではなく、何度も鎌を振っては斬撃を飛ばしていた。

にも関わらず、巧達は必死に逃げてはいたが、なぜか話をしながら逃げていたのだった。

『ここは俺達に任せろ』

「いや、でも……………」

『いいから！』

そう言っつて、リオモンたちはスナイモンに向かっていった。

「巧、早く！」

「くっ……………」

巧達はこの場をリオモン達に任せ避難した。

『バーニングネイル』

リオモンは、自身の腕のラインを紅黒く光らせ高熱を帯びた爪で低空飛行していたスナイモンを切り裂こうとするが、

『そんな攻撃、効かない。』

鎌で弾かれてしまった。

『ツインガルショット』

ガルモンも二丁拳銃で射撃をするも、

『シャドウシックル』

やはり鎌の一振りによって無効化されてしまう。

『ガリトラップ』

ピクシモンは輪状の光を飛ばして攻撃するも、

『邪魔だ』

スナイモンは鎌を振り回して弾き飛ばす。

『ブレイジングファイア』

『ブレイジングアイス』

テリアモンとロップモンもそれぞれ炎と氷を吐き出して攻撃するも、

『鬱陶しい』

スナイモンが羽を使って飛び上がったため射程距離から外れてしまった。

少し離れた岩陰に隠れていた五人はデジモン達が苦戦しているのを苦々しく見ていた。

「ああ、もう見てらんねえ。三葉、包丁貸してくれ」

「ちよつと待て、巧。行ってどうするつもりだ」

「そつよー。あんなバケモノ相手に策も無しに行く気ー?」

「そつだ。何考えてんだ」

「……危険」

「かと言って放っておけないだろ。心配すんな、こつという危険なことには嫌と言うほど慣れてる」

「……はあ、わかつたよ。だったら僕らも行く。良いよね、みんな」

「オツケー」

「仕方ない、葉月先輩が行くなら」

「……充先輩が行くなら」

五人の決意が固まったとき、五人の右手から聖なる光が溢れた。

(なんだかわからないけど物凄い力を感じる。)

それらの光は次第に一つの形を形作っていった。

「これは……、銃なのか?」

巧が言ったように、五人の手の中にある『それ』はモデルガンに似たような物だった。

ただし、『それ』の銃口から見て右側の側面には、液晶画面と上下の矢印形のボタンと丸いボタンが付いていたのである。

ちなみに全て基本銀色だが、先端とグリップはそれぞれで色が違っていた。

巧は赤色、充は青色、葉月は黄緑、一也は緑、三葉は桃色だった。  
「ん、何か書いてあるね。『D TRIGGER』？ これD トリガーって言うんだ」

「……みんな、俺はこいつから物凄い力を感じるんだ。こいつならいける気がする」

「僕もだ」

「私も」

「葉月先輩と同じく」

「……充先輩と同じく」

「よし、じゃあ反撃開始だ！」

「」「」「」「」「」

『はあはあ、かなりキツくなってきたな』

『オイラだって限界だよ。でも、充達を逃がすにはもう少しがんばらないと』

『……そうだったな』

五体のデジモンは巧達を逃がそうと必死に戦っていた。

「おゝいりオモン、加勢に来たぞ」

『え、なんでお前らがいるんだ。何しに来た！』

「加勢しに来たって言うてんだろ。心配すんな。俺達なら大丈夫だ」  
巧

「ごちゃごちゃうっさい。葉月先輩、見ててください」

エンフォース・バレット  
強化弾 イツカクモン」

「ハーブンバルカン」

一也はそう言っただけ。トリガーの引き金を引いた。すると、銃口から角の形をした弾が発射された。

そして、角は二つに割れ、中から出てきたホーミング弾がスナイモンに直撃した。

『ギャシャシャ、何だ』

「一也の奴、先々行きやがって。俺だつて。……これで良いか」

スキル・バレット  
「技能弾 ユキダルモン」

巧がそう言っただけ、引き金を引くと、白色の弾が発射された。

その白色の弾は真つすぐスナイモンに……

『痛っ』

向かわず、リオモンの右手に直撃した。

「あれ、おかしいな」

『巧、てめえ……わつと』

隙が出来たとみたスナイモンはリオモンに鎌を振り下ろしたが、間一髪リオモンは飛び上がって避けた。

『こんにやろう。食らえ、』

「絶対零度パンチ」

『

リオモンは回避したところから握り拳を作つて殴りつけた。

『ギシャッ。……何だ、これは？』

すると、殴りつけたスナイモンの羽が凍りついた。

『……って、俺こんな技使えたっけ？』

「あ、あいつの動きが悪くなつてる」

羽を凍らされたせいで、うまく飛べなくなったスナイモンはバランスを取れなくなり、地面に墜落した。

「……チャンス」

「みんなー、総攻撃だー」

『クリムゾンフレイム』

リオモンは紅色の火の玉を吐き出して攻撃する。

『ガルランチャー』

ガルモンは二丁拳銃で一点を狙って連射する。

『ガリトラップ』

ピクシモンは光の輪を幾つもぶつけて攻撃する。

『『ダブルタイフーン』』

テリアモンとロップモンは、それぞれ体を回転させて竜巻を起し、同時にぶつける。

『ギシャ〜』

スナイモンは立て続けに攻撃を受け、まともに立てなくなっていた。

それでも、スナイモンは何かに呪われているかのように立ち上がるうとした。

「なんで、こんなになってまで……立ち上がるうとするんだ！」

『ギシャ……、お前らを倒すのが闇の意思。破壊するだけ』

「……巧、無駄だよ。ここは僕がやる」

「充、何する気だ……」

「巧、黙ってて……、ピュラファイ・バレット」

そう言って、充は引き金を引いた。

すると、銃口から清らかな光を纏った弾が発射され、スナイモンを貫いた。

『ギギイ…………』

「充、何してんだよ！あいつ、もう限界だったんだぞ」

「こつこついうのを甘いつて言うのかな」

「お前…………」

「…………巧、スナイモンをよく見てよ」

充に言われた通り、スナイモンの方を向くと、

「何だ、これ…………？」

スナイモンの体が白く光り、体から黒いもやのようなものが出て  
いつていた。

「purifyは浄化っていう意味。つまり僕は、あの黒いもやを  
追い出して浄化する弾をスナイモンに打ち込んだってこと。ああ、  
甘いつて言ったのは本当は詰めが甘いつて言いたかったんだけど間  
違えたんだ」

「充、てめえ…………」

「あたし達は元から分かってたよー」

「えっ…………」

「葉月先輩が充先輩を信じるように言ってたからな」

「うっ…………」

「…………私は充先輩をちゃんと信じてた」

「くっ…………」

『『『何を疑ってたの？』『』『』』』

「うっ…………」

「巧、そんなに僕のこと信用出来ない？」

「すみませんでした！」

『ギギイ、やっと解放された』

戦闘から数十分経ってスナイモンは起き上がった。

「お、起きたか」

『ああ、いきなり襲って済まなかったな』

「いや、操られてたんだろ。こつちこそ対抗する為とはいえ悪かったな」

『それよりスナイモン、一体何があつたんです？』

『俺は元々この森に住んでいたんだ。昨日もこの森で虫とか食つていたんだが、知らず知らずの間に黒い霧の中に入ってたんだ。そうしたら、少しずつ自分の中にどす黒い感情が溜まって、最終的には俺の意思はほぼ無くなっていたんだ』

「……………そうだったの」

『多分、まだこの辺りにも黒い霧があるだろうし、俺と同じように操られたデジモンがいるかもしれないから気をつけるよ』

「分かった。あ、そうだ。スナイモン」

『ん、何だ。……………って何のつもりだ』

スナイモンがそう言ったのは、巧がD トリガーの銃口を向けたからである。

「巧、何考えてるんだ」

「そーよ。何してるの」

「クソ野郎が」

「……………信じられない」

『巧の人で無し！』『』

「……………バレット・スキャン」

巧がそう言って引き金を引くと、銃口とスナイモンの間が赤く光り、D トリガーがピロリツと電子音を発した。

「スキャン完了。驚かせて悪いなスナイモン。」

お前のデータを少しコピーしただけだ。この機能はスナイモンが気絶してる間、いじくってわかつたんだ。……………で、お前らはそんなに俺が信用できないのか？」

四人と六匹のデジモン（スナイモン含む）が巧に土下座したのは言うまでもない。

「じゃあ、行くか。スナイモン元気だな」

「本当に助かった。ありがとな。ギシャシャシャー」  
そうしてスナイモンは森の奥へ飛んで行った。

『 というわけでしゅっぱあーっ』

こうして、五人と五匹の冒険が始まった……。

## 第二話 「未知との遭遇」(後書き)

今話からキャラ紹介入れます。

刃坊 巧 (じんぼう たくみ)

光山中学校 二年

身長160cm。栗色の髪不幸体質の少年。

不運な事に慣れてるからか、危機察知能力や反射神経に優れている。

(本人曰く、余り素直に喜べない)

赤色のD トリガーを持つ。

リオモン

成長期 小竜型 ワクチン種

紅色の体の蜥蜴のようなデジモン。

頭部に三本の角を持ち、肩から後方に伸びた突起から、手の甲にかけて黒いラインが入っている。

必殺技は紅色の火の玉を放つ「クリムゾンフレイム」と、肩から手の甲にかけて入ったラインが紅黒く光ると同時に高熱を持った爪で切り裂く「バーニングネイル」。

次話もよろしくお願いします。

第三話「紅蓮の飛竜」(前書き)

第三話です。

遂に……

### 第三話「紅蓮の飛竜」

スナイモンと別れた巧達はグローブフォレストを歩いていた

「なあ、テリアモン？」

「なに〜、一也〜？」

「ミドルタウンとかいう町まで、あとのくらいなんだ？」

「この森は広いからね〜、もうしばらくかかるよ〜」

「ふうん、そうか。 すいません、葉月先輩、もう少しかかるらしいです。 あ、少し疲れました？、 どこか怪我しませんでした？、喉渇きませんか？」

「えーっと、今のところは大丈夫だよー」

「そうですか。 何か必要なことがあったら言ってください」

「じゃあ、俺は飲み物が欲しいな」

「黙れ」

「てめえ……………」

「……………充先輩、タオルです」

「ああ、ありがとう」

「……………充先輩、虫よけスプレーです」

「ああ、ありがとう」

「……………充先輩、お茶です」

「ああ、ありがとう」

「三葉、俺にもお茶くれ」

「……………ドブ水でも飲んでろ。 ゲスが」

「三葉、お前もか！ てか一也よりひでえ！」

「三葉ちゃんて準備良いねー。 元々は巧の家に行っただけだったのに。 虫よけスプレーなんか普通持って来ないでしょー」

「……………充先輩親衛隊長として当然です、お義姉様。 ……虫よけス

プレーは害虫「タクミムシ」を充先輩に近づけさせない為です」

「三葉……、その害虫って俺か？、てか俺だろ！」

「あー、納得ー」

「葉月は納得するな！あと、さりげなくお義姉様って呼ばれてたぞ」

「葉月先輩、俺も持って来ましたよ、虫よけスプレー。」

「一也、お前もか！」

みんな仲良く(?)歩みを進めていた。

「で、僕達は何で断崖絶壁に居るのかな、テリアモン？」

「うーん、わかんない、強いて言うなら森から抜ける道知らなかったからかな」

「……え……」「……」

五人は沈黙した。

「……もしかして、ロップモンも？」

「三葉、皆さん……、すいません」

「リ、リオモン達は……？」

「生まれたばつかなんだから分かる訳ないだろ」

「オイラも」

「アタシも」

再び五人は沈黙した。

そして、同じことを思った。

(どうしよう……。)

5人がかなりの不安にかられていると、巧達の頭上を一羽の鳥が飛んでいった。

その鳥の体と羽は赤色で、白い頭には二本の角が生えていた。

「あ、あの鳥さんに聞いてみようよ。あれも、デジモンでしょ？」

「ああ、あれはアキラモンっていうデジモンだ。成熟期らしい」

「凄いなー、巧なんで分かったのー？」  
「D トリガーの機能に凶鑑みたいなのが付いていたんだ」  
「完璧に使いこなしてるねー」  
「くそつ、巧に先越された」  
「どうだ一年坊、フハハハ」  
『巧もー也もいちいち、張り合うなよ……』  
「とりあえず、呼んでみよー。おい」  
『いや、飛んでるから聞こえないでしょ……』  
すると、アクイラモンはUターンして真っすぐ巧達に向かってきた。

それと同時に五人のD トリガーがピリリと鳴り始めた。

『嘘……』

「葉月先輩、さすが！」

「巧、さつきからD トリガーが やかましく鳴っているよ」

「それより、このままじゃ……」

「……ぶつかる」

『逃げろ』

ぎりぎりだったが巧達は何とかアクイラモンの角に串刺しにされるのを、避けた。

「危ないじゃないのー！」

「そつだ、葉月先輩が怪我でもしたらどうする！」

「なあ充……、やっぱりあれか、アクイラモンが、スナイモンみたいに『黒いもや』に操られてるパターンか？」

「多分ね……」

「やるしかないか……」

「……私が行く。ロップモン」

『はい』

そう言って、三葉はD トリガーを手にして前に出て、ロップモンもそれに続いた。

『ブレイジングアイス』

ロップモンは氷を吐き出したが、アクイラモンまでは届かなかった。

しかし、アクイラモンの気は引けたようで、三葉とロップモンに向かってきた。

『グライドホーン』

アクイラモンは角を突き出して急降下し、串刺しにしようとするが、三葉とロップモンは跳び下がって避けた。

「……………浄化弾」

三葉はD トリガーから清らかな光を纏った弾を放った。

充がスナイモンから『黒いもや』を追い出すのに使った弾だ。

『グアアッ』

弾丸にアクイラモンは撃ち抜かれるが、

『……………闇の力をなめるな』

弾丸の光は消え、虚しく落ちた。

「……………何で効かないの」

「闇の力が強すぎるのかな。気にしなくて良いよ」

「……………充先輩、優しい」

「はいはい、三葉はわかったから。……………スナイモンのときみたいに  
ある程度ダメージを与えないと駄目なのか？」

『巧、次はオレ達が行こう』

「分かった。リオモン、あれ使っぞ」

『オッケー』

今度は、巧とリオモンが前に出た。

「技能弾、スナイモン」

『やっぱり痛っ。』

「シャドウシックル」』

リオモンが爪で切り裂くように手を振る。すると、音速の斬撃がアクイラモンに飛び、切り裂いた。

『ギャオオー』

『効いてるな、この調子でいくぞ』

「ああ」

そのとき

「許さないよー」

「え、葉月？」

葉月がいきなり飛び出したのである。

「強化弾、サンフラウモン」

「サンシャインビーム」

葉月はD トリガーから太陽光線を放ちアクイラモンにぶつける。  
『グウウ、標的変更』

突然現れた葉月に狙いを変え、アクイラモンは今までとは段違いな勢いで突進する。

(あ、足が……動かない)

「クソッ……」

ドンッ

「えっ……」

急降下したアクイラモンは空へ舞い上がった。

足で巧を掴んで……

「…………おわっ、高え〜。つか、なんでこうなったんだ、確か葉月を助けようとして突き飛ばしたら、アキラモンに捕まって……。なるほど、ハハハハ。…………どうしよう…………」

不運な少年、巧は空中で一人困っていた。

「…………こうなりやヤケだ。」

強化弾、モスモン」

「モルフォンガトリング」

自らの不運を呪いつつ、巧はD トリガーから秒間100発もの弾丸を放った。

『グギヤアア、このっ、落ちろ』

「いつ…………」

痛みと怒りからアキラモンは乱暴に巧を投げ落とした。

( ) 空から落とされるなんて、どうすりゃ良いんだ？…………俺、死ぬのか？…………この世界来たばっかなのにもう終わるのか？)

『タ〜ク〜ミ〜！』

(リオモン？)

『絶対、助けるからな！諦めるな！』

(風がうるさくて、何言ってるのかわかんないけど、あいつが諦めてないのは分かる。俺が諦めてどうする！こういう不運には慣れるんだろっが！)

「リオモ〜ン！」

そのとき、D トリガーが光を放ち、自動で弾が装填された。

(これは、新しい力か？…………よし！)

『エボリューション・バレット』  
「進化弾！」

巧は空中から、光輝く弾丸を放った。  
弾丸は流星のように輝きリオモンに当たった。  
そして、弾丸を受けたリオモンはまばゆい光に包まれた。

『リオモン進化』

( どうなったんだ？どうにもならなかったのか……？ )

『タ〜ク〜ミ〜』

( リオモンの声が聞こえる。 )

「うう、リオモ……ン？お前、リオモンなのか？って俺、空飛んでる！」

巧は確かに空を飛んでいた。紅い飛竜の背に乗って。

その飛竜は長い尻尾を持ち、腕と一体化した翼で大空を飛んでいた。

そして、二本の角が頭に生えているその姿はどことなくリオモンを連想させた。

『俺はリオモンが進化したヴルムモンだ』

「進化って、……成熟期か？」

『そういうこと。』

「……ヴルムモン、行けるか？」

『勿論』

「じゃあ……」

「『反撃開始だ！』」

その頃、葉月達は……

「うー、私のせいで巧がー……」

「葉月先輩、きつとあのクソ野郎は生きてますよ。何やかんやでしぶといですから……」

（何してんだ、巧の野郎は。戻って来たらポコポコにしてやる……）  
そのとき、崖の向こうからアクイラモンが飛んで来た

「……アクイラモンが来た！」

「心配する暇すら無いのかな……」

（リオモンはどこに行っただろう？光が当たった瞬間輝いて、急に崖から飛び下りて、そこから見失ったけど……）

アクイラモンは葉月達を狙い飛んで来た。

『残り四人と四匹』

『バーニンググライド』

『ガハッ……』

葉月達を狙っていた筈のアクイラモンは急に右に吹っ飛んだ。

背に少年を乗せた紅い飛竜が炎と高熱を纏った翼をぶつけたからだ。

「五人と五匹の間違いだろ？」

巧とヴルムモンである。

「葉月先輩に心配させやがって、……降りたら覚悟しろ」

「……生きてた」

「さすが、巧」

「だあぐうびいー、本当に良かったー」

「心配かけてごめんな」

『これが……』

『進化ですね』

『すごい』

『オイラだって絶対進化してやる』

『ヴルムモンだ。よろしく、チビツ子の諸君』

『『オイ!』』

『キサマら、生きていたのか』

「不運や危険には、ある程度慣れてるんだ、なめんな! まあ、マジで死ぬと思ったけど……」

『次は確実に倒す』

『じゃあ、その前に浄化する』

『ブラストレーザー』

アキラモンは雷鳴のような鳴き声とともにリング状の光線を放った。

『甘いよ』

が、ヴルムモンは難無く避けた。

『バーニンググライド』

そして、炎と高熱を纏った翼でアキラモンを崖の上と吹っ飛ばした。

『グアア、この……』

「終わりだ、浄化弾」

巧は最後に清らかな光を放つ弾をアキラモンに打ち込んだ。

『グウウ、ガアア……』

すると、アキラモンの体から「黒いもや」が抜け出た。

『……やっと元に戻れました』

どうやらアキラモンの浄化は成功したようだ。

「ふう、疲れた」

『もう、へとへと……』

浄化が済んだことを知った巧とリオモン（力を使い果たしヴルムモンから退化）も崖に戻って来た。

「ごべんね、私のせいで」

「はづつ、ガハツ、気につ、ゲボツ、するっ、ゲハツ、な……。一也俺をいちいち殴るな！」

「俺の拳を止めただと……」

「黙ってる！」

「許してくれるの……？」

「当たり前だ……」

「わーい、ありがとー。あ、アクイラモンのデータしてスキャンして来るねー」

「立ち直り早っ。てか、ここは俺だろ。って聞いてねえ。ま、良いか……」

『 ちょっと葉月さんでしたっけ。な、何する気ですか！』

「いや、あなたのデータをスキャンしようとー」

『 何で銃口をこっちに向けてるんですか！』

「いや、こういうやり方だからー」

「あ……」

端から見たら、葉月がアクイラモンに銃を向けて、撃ち抜こうとしているようにしか見えなかった……

一方、リオモンは……

『 進化出来たからって調子乗るな』

『 何がチビツ子諸君よ』

『 そっだ、そっだ。』

『 ……呆れ果てました』

『ずびばぜんでした』

他の四匹にシバかれていた。

『この崖の真下に流れる川に沿って行けば森を抜けられます』  
「そっぴゃあ、あつたな。俺が落とされたのはもう少し遠いところで、真下は岩山だったけど」

『巧さん、本当にすいませんでした。……本当は私が下まで運ぶべきなんです、ダメージが大きいので……すいません』

「いや、そのダメージを負わせたの俺達だから。こっちこそすまないな。……じゃあ、行くか。リオモン」

『え、またか』

「仕方ないだろ。いくぞ、進化弾」

『リオモン進化』

『ヴルムモン』

「さ、みんな乗れ」

『え、全員乗せんのか……？』

「当然！」

巧達の冒険は続く……

『……………重い……！』

### 第三話「紅蓮の飛竜」（後書き）

#### 登場人物紹介

……ではなく、D トリガーの説明をします。

#### D トリガーとは

……このデジタルワールドでのデジヴァイス。様々な弾を装填して使用可能な、武器として使えるデジヴァイス。

#### エンフォース・バレット 強化弾とは

……指定したデジモンの技を弾として放つ弾。使用出来る技は限られる。

#### スキル・バレット 技能弾とは

……データが埋め込まれた弾をパートナーデジモンに撃ち込み、埋め込まれたデータの技をパートナーデジモンに使用させる弾。弾を撃ち込むタイプのカードスラッシュと考えると分かりやすいかと。

#### エボリューション・バレット 進化弾とは

……パートナーデジモンを進化させる弾丸。進化する段階によって

は……

ヒュラマイ・バレット  
浄化弾とは

……「黒いもや」に支配されたデジモンを浄化する弾。しかし、あの程度ダメージを与えて闇の力を弱めないと効果は見込めない。

バレットスキャンとは

……デジモンのデータをスキャンして、新たな弾を精製すること。

長ったらしくてすみません。

#### 第四話「群青色の狼」(前書き)

かなり、遅くなりました。  
すいません。

#### 第四話「群青色の狼」

崖下に降りた巧達は、幅が数十メートルはあり、深さも二メートルはある川に沿って歩いてた。

「僕はつきり川って小川かと思っていただけ、こんな大きな川だったんだね」

『そんなことどうでもいいから、俺は腹減っ……!』

リオモンは空腹を訴える。が、その途中、リオモンの頬を包丁が掠めた。

「……充先輩の話がどうでもいいってどういうこと?」

『いや、それは……その……すいません』

『……恋する乙女は恐ろしいですね』

「いや、でも僕達もこの世界に来てから何も食べてないしね。町までまだあるし、一旦ご飯も兼ねて休憩しない?」

「……そうですね、そうしましょう。異論は認めません」

「オイラも賛成」

「私もさんせい」

「俺も、当然葉月先輩と同意見です」

『僕も』

『アタシも』

「じゃあ、そうするか。進化でエネルギーを使ったんだろ。良かったな、リオモン」

『あ、ああ』

(死ぬかと思った)

「とりあえず、まずは食料を調達しないと。あと、薪にする木も必要だね」

「じゃあ、私達はあの林みたいところで薪とか木の实とかを探してくるね」

『アタシも付いていく』

「俺だつてお供しますよ！」

『一也、待ってよ』

葉月とピクシモン、一也とテリアモンは少し上流にある林に向かつていった。

「じゃあ、俺達はこの川で釣りでもするか？」

「……黙れ、下種ゲスが」

「やっぱり、俺の扱いひどいな！」

『巧、俺は包丁投げつけられたぞ』

「訂正する。俺達の扱いひどいな！」

「まあまあ、ここは巧の言った通り、魚を釣って食料を確保しようよ」

「……賛成です。釣り、最高お〜」

「うん、俺も分かってたよ。何となく、こうなるの」

「……はい、釣り竿です」

そう言つて、三葉はバッグから釣り竿（任天堂の某育成ゲームの「す〇いつりざお」レベルの逸品）を三つ取り出し、充、ガルモン、ロップモンに渡し、自分も一つ取り出した。

『いっぱい釣るぞ〜』

「僕も頑張ろうかな」

『やれるだけやります』

「……たくさん釣つて充先輩に褒めてもらつ」

『あの……俺達の分は？』

「……………」

「いや、何がおかしいのかわからないみたいなの反応されても……」。

「……分かったよ、お前から見てろよ」

巧は足元に落ちていた木の枝二つ（1mくらいのものと10cmくらいのを各一個ずつ）を糸で繋いで結んだ。

……それは釣り竿に見えなくもなかった。

「見てろよお前ら。この竿で大物を釣り上げてやる」

『マジでか巧。よっしゃ、俺の分も作ってくれ』

「ああ、こいつらに一泡吹かせてやる」

そこには、糸で繫いだ木の棒を持って、壊れたかのように笑う人間とデジモンがいた。

「さすが、す〇いつりざお、これで、九匹目です」

「僕はこれで十二匹目。本当に凄いね、入れ食い状態だよ」

「……褒められた。……十匹目」

ロップモン、充、三葉は順調に釣っていた。

「……今だ！」

ガルモンがそう言うと、パンパンと音が鳴り、しばらくして、水面に魚が受かんできた。

長い間待つのが苦手だったガルモンは、二丁拳銃で魚を撃ち、浮かんできたところを網ですくって捕っていたのだ。

「大漁、大漁」

「すごいね、ガルモン。完全に釣りじゃないけど……」

「やっぱりオイラってスゲー。にしても美味そう。……いただきませす」

「いやガルモン、これ生だよ。というかまだ生きてるよ」

「そんなことは関係ないの」

「あ、そう……。巧、どうだ、やっぱり貸そうか？」

「何を言ってるのかね、充君。君達の「す〇いつりざお」とかいっガラクタに俺達の「ありえないいつりざお」が負ける訳ないだろう」

「そうだな、巧。この「ありえないいつりざお」の前ではどんな魚も虜になるのだから。フハハハ」

「確かにありえないよその釣り竿。だって、ただの木の棒だからね。というか二人共完全にキャラ崩壊してるよ」

「……放っておきましょう」

「戯れ事を、……きた!」

「……嘘」

なんと、巧の「ありえないつりざお」がまさにありえないくらい  
しなっていたのである。

「フハハ、来たぞ俺達の時代が」

『ああ、巧、いっけ』

「うおりゃあ〜」

巧が渾身の力を込めて竿を引っ張り上げると、某ハンティングア  
クションゲームで魚竜を釣り上げたときのように、水中からダイナ  
ミックに長細い巨体が宙を舞った。

「見たか、「ありえないつりざお」の力を。あんなでっかい魚を釣  
り上げたぜ」

「いや、……巧違うよ。あれはシードラモンっていう成熟期のデジ  
モンだよ。しかも、……黒いもやで操られてる」

「そっか、シードラモンっていうデジモンか……、ってデジモン!  
跳び上がったシードラモンは体をひねりながら、巧とリオモンに  
接近する。」

「『え……』」

バツチイイン

「どわああ〜」

『ぎゃああ〜』

巧とリオモンはシードラモンの尻尾のフルスイングによって  
林の方向へ飛ばされていった。

ヒュヒューン

「あれー、今巧とりオモンが真上を飛んでった気がー」  
「へえ、本当ですか？（本当だったら爆笑、ギャハハハ。）」

『アイスアロー』

巧とりオモンを吹っ飛ばしたシードラモンは川に再び着水し、そして、川の水を凍らせて、矢のように飛ばした。

『ツインガルショット』

ガルモンは二丁拳銃で氷の矢を撃ち落とす。が、何本かは打ち落とせずにガルモンに向かってくる。

『クソツ』

しかし、その矢がガルモンに刺さることは無かった。

「強化弾、ガルルモン」

「フオツクスファイヤー」

充がD トリガーから蒼色の炎を噴射して残りの氷の矢を溶かしたからだ。

『充、助かった』

「気にしなくて良いよ」

「……強化弾、トゲモグモン」

「……ヘイルマシンガン」

三葉はD トリガーからクリスタルで形成された弾を連射した。

『効かん、アイスアロー』

だが、シードラモンは氷の矢で撃ち落とされた。

「これじゃあ、キリが無いね。何とかしないと……」

『オイラが進化すれば……』

「でも、進化つて、しようと思えば出来るものじゃないよね」

『分かってる。でも、絶対出来ないと思った訳じゃないよ。充、オイラを信じて』

「分かったよ。ここまで来たら、やってみよう。僕らの力を信じる」

そのとき、充のD トリガーの画面が白く発光し、自動で弾が装填された。

（これは、巧のときと同じ……進化の力！）

「ガルモン、いくよ、進化弾」

弾丸は流星のように輝きガルモンに当たった。

そして、弾丸を受けたガルモンはまばゆい光に包まれた。

『ガルモン進化』

光りの中から現れたのは群青色の毛並みの狼だった。その狼は尻尾の先端と一体化したマシンガンを装備していた。

『リガルモン』

「これが、ガルモンの進化した姿……」

『オ、オイラが進化した……凄え、オイラすっげ〜』

『……成熟期に進化したか。さて、どれほど強くなったのかな。アイスアロー』

シードラモンは様子見を兼ねて、氷の矢を放った。

『そんな様子見で良いのか。』

『テイルランチャー』

リガルモンは尻尾のマシガンで全て撃ち落とし、

『喰らえ』

さらにシードラモンにも命中させた。

『ぐぬう……。こうなったら……。』

シードラモンは水中に潜っていった。

そして、

『アイスアロー』

水中から氷の矢を放った。

『……がはっ』

『大丈夫？ リガルモン』

『ああ、でもこれじゃどこから攻撃して来るか分からないよ』

シードラモンは水面から視認できない深さまで潜ってそこから攻撃していたので、リガルモンの言う通り、どこから攻撃が来るのか分かりにくく対応が遅れたのだった。

『……厄介』

『ですね』

『……僕に考えがある。みんな集まって』

そう言って充はリガルモンの背に跨がった。

『テイルランチャー』

何を思ってたか、リガルモンは尻尾のマシガンで水中に向かって弾を連射した。

「何をする気が知らんが……。」

「アイスアロー」

疑念を抱きながら、シードラモンは弾を避けつつ、氷の矢で迎撃した。

「……技能弾、ビットモン」

「イヤーランサー」

ロップモンは跳び上がり、その長い耳を立ち上がらせて硬化させ、  
「ハイツ、ハイツ、ハイヤーツ」  
氷の矢を全て突き落とした。

「まだまだ、テイルランチャー」

リガルモンはさらに輪をかけて尻尾のマシニングンを連射をした。

「チツ……」

（こんな闇雲に撃ちやがって、何考えてるんだ……）

「……そこだ！ 強化弾、イツカクモン」

「ハーブンバルカン」

充は水中にホーミング弾を撃ち込んだ。

「ちっ、この、目茶苦茶撃ちやがって……！ しまっ……」

ドオオン

「ぐあっ……」

不意打ちを受けたシードラモンは水面から跳ね上がった。

「まだだ、リガルモン。 技能弾、ガオガモン」

『ダッシュダブルクロー』

リガルモンは視認できないほどのスピードでシードラモンに飛び掛かり、対岸に叩きつけた。

『ぐぼっ……、この、アイスア……』

『させない、ブレスオブディンゴ』

シードラモンが空気中の水蒸気から氷の矢を生成するより早く、リガルモンは群青色の炎のブレスを吐き出した。

『ぐわあああ』

『これで最後だ。 浄化弾』

そして、充はD トリガーから、清らかな光を放つ弾を撃ち込んだ。

『 すまない。闇の力から解放してくれてありがとう』

『 そんなに気にしなくていいよ』

『 くそっ、あの洞窟を覗いたばかりに……』

『 ……洞窟？』

『 ああ、私はこの川の上流にある湖に住んでいたんだが、湖の近くにある洞窟に異変を感じて覗き込んだら、突然黒い霧のようなものが吹き出してきて、気が付いたらこんなことに……』

『 洞窟か……』

『 ねえ、充』

『 どうしたの、ガルモン』

（退化したんだ。）

『確か巧とリオモンが飛ばされたのって……』

「あ……………」

## 第四話「群青色の狼」（後書き）

### キャラ紹介

かねしろ  
金城 充

光山中学校 三年

身長173cm。

頭脳明晰で生徒会長とバスケット部キャプテンを務める黒髪の爽やかイケメン。

ファンクラブも存在。

葉月の兄。巧の家の隣に住んでいるので、巧とは昔からの知り合い。青色のD トリガーを持つ。

### ガルモン

成長期 獣型 データ種

水色の毛並みのワリガル（ディンゴ）のような姿のデジモン。二足歩行。

二丁拳銃を所持。

必殺技は二丁拳銃で撃ち抜く「ツインガルショット」と二丁拳銃で蜂の巣の如く連射する「ガルランチャー」。

## 第五話「激流の大鱈」(前書き)

ここで、新キャラ登場です。

そして、四匹目のオリジナルデジモンです。

## 第五話「激流の大鱈」

ガルモンがシードラモンとの戦闘の中、リガルモンに進化したころ……

「いやあ〜〜！」

「うわあ〜〜！」

「待て、コラ〜〜」

「潰してくれるわ」

巧とリオモンは湖の辺で、黒いもやに操られた二匹のデジモンに追いかけていた。

「なあ巧、俺達何で走ってんだっけ？」

「そりゃ……」

「『うわ〜〜』」

ドオオン

『痛て……』

「一体どこまで飛ばされたんだ……？」

『オイ、何だてめえら……』

『空から降って来たな』

『いや、俺達は……』

ピリリリ〜

「……リオモン、逃げるぞ」

『まさか……黒いもや?』

『御明答』』

「……………」

『……………』

「『ぎやああ〜』」

「シードラモンに吹っ飛ばされて落下したところが敵のど真ん中だったから……一言で言つと運が悪かった」

『そんな〜』

『「ごちゃごちゃうるさいわ、シエルフアランクス」』

黒いもやに操られた二体の内一体、トータモンは背中の中羅からとがった岩を飛ばしてきた。

「おわあ〜」

『いやあ〜』

巧とリオモンは半泣きになりながら、何とか避けた。

「くそっ、こうなったら、進化弾」

『リオモン進化』』

進化の力を秘めた弾丸を受けたリオモンの体は光り輝き、成熟期に進化を、

シーン

『……………あつれー、おかしいな』』

「……しなかった。」

『……………』

「……………」

『……お腹が空いて力が出ない』

「そんなあ〜」

『ファイヤーブレス』

トータモンと同じく黒いもやに操られていたデジモン、ティラノモンは深紅の炎を吐き出した。

『もう、嫌だ〜』

「熱っち、危ね……………くそっ、何か食べ物は……………」

巧達は何とか避けて消し炭にならずに済んだ。

そして、巧は走りながら自分の所持品から食べ物在必死に探していた。

「こんなとき、一也か三葉がいたら……………駄目だ、俺の言うこと聞かねえ……………くそっ、何か……………あった！ リオモンこれを食べ」

巧は服のポケットから、カ○リーメイトに次ぐ○塚食品の主力商品のスナックバーを取り出して、リオモンに放りなげた。

『これは？』

「ソ○ジョイっていう食べ物だ」

『おお、分かった』

リオモンはソ○ジョイを食べて、空っぽだったお腹を満たした。

『うお〜、大豆パワー。よし、巧いけるぞ』

「分かった、進化弾」

『リオモン進化』

進化の力を秘めた弾丸を受けたりオモンの体は光り輝き今度こそ進化を

『ヴルムモン』

……果たした！

「おし、反撃開始だ！」

『おお！』

巧はヴルムモンに乗り、大空へ舞い上がった。

『逃がすか、ファイヤーブレス』

ティラノモンは飛び始めたヴルムモンに向かって深紅の炎を吐き出した。

しかし、ヴルムモンはあくまで余裕を持って体を翻し、炎に向き直った。

『誰が逃げるか、クリムゾンバースト』

そして、空中から紅色の炎を吐き出して押し返した。

『ぐっ……』

『ふむ、なら今度はわしだ、シエルファランクス』

悔しさに呻くティラノモンを一瞥し、トータモンは背中の中甲羅から岩を飛ばして攻撃した。

『なんの、バーニンググライド』

ヴルムモンは炎を纏った翼で岩を全て叩き落としていった。

『ちい……』

「今度はこっちからだ、技能弾、ペガスモン」

「ニードルレイン」

巧はD トリガーから針の雨を撃ち出した。広範囲に渡り豪雨の如く降り注ぐ針の雨はティラノモンとトータモンを容赦無く襲った。

『ぐあ……』

『ぐはっ……』

『いくぞ、バーニンググライド』

間髪入れずにヴルムモンは炎を纏った翼をティラノモンにぶつけた。

『ぎゃああ……』

『いっけえ、浄化弾』

止めとばかりに巧は清らかな光を放つ弾丸をティラノモンに撃ち込んだ。

すると、ティラノモンの体から、黒いもやのようなものが抜け出て消えていった。解放されて力が抜けたのか、ティラノモンはそのまま気絶してしまった。

『ちい……こんの、シエルフアランス』

「通用しない、技能弾、スナイモン」

『シャドウシックル』

トータモンが撃ち出した岩の刃を、ヴルムモンは翼の羽ばたきで起こした音速の斬撃で切り裂いた。

『喰らえ、クリムゾンバースト』

グルムモンは羽ばたきでの斬撃を止め、今度は紅色の炎を吐き出して、トータモンを焼き尽くした。

『ぐわああああ』

「これで終わりだ、浄化弾」

最後に巧は、ティラノモンに撃ち込んだ清らかな光を放つ弾丸を、トータモンに撃ち込んだ。ティラノモン同様、トータモンからも黒いもやが抜け出て消滅した。

どうやら、ティラノモンに続きトータモンの浄化にも成功したようだ。

「『湖の辺の洞窟？』」

『ああ、この湖の辺に洞窟があるんだが、最近何か違和感を感じたんだ。それで、この湖に住んでたシードラモンが様子を見ようと洞窟を覗き込んだんだ。そうしたら、黒い霧みたいなのが吹き出してきた、シードラモンは急に暴走し始めて、漏れてきた黒い霧を浴びた俺達もあんなことに……』

「なるほどな」

『そのシードラモンって、あいつか……』

『知っておるのか？』

「いやあ、俺達そいつに吹っ飛ばされてここまで来たから……でも、充達がいるし、シードラモンも正気を取り戻してるだろうよ」

『そうか、そうなら良いのだが……』

『あいつらなら大丈夫だ、多分』

「『まあ、でも、もし元にもどってなかったら俺達が力づくで元にもどすけどな！』」

結構、根に持つタイプだった……。

「ここが、ティラノモン達が言っていた洞窟か……」  
『でかつ……』

巧とリオモンの目の前にあったのは、高さ3メートルはある巨大な洞窟だった。

「この洞窟に何かあるんだろうな」

『巧、進化してさっさと終わらせよう』

「あ、ああ、進化弾」

『リオモン進化』

『ヴルムモン』

「進化したのは良いんだが、どうするつもりだ？」

『とりあえずぶっ壊す』

「何だ、そりゃ……」

かなりアバウトなプランに巧は半ば呆れ気味だった。

『まあ、見てろって……』

「ハ、ハハ……っ！　ヴルムモン、そこから離れる！」

『えっ……ぐわっ！』

巧の叫びも虚しく、突如洞窟から吹き出た黒い霧にヴルムモンは呑み込まれてしまった。

『ぐあっ、があっ、ぐっ、うわああ……』

「おい、ヴルムモンどうした、大丈夫か……まさか……」

『グギヤアアア』

「嘘だろ、ウルムモン……」

黒い霧に呑み込まれたウルムモンの目は赤く染まり、闇に染まっ  
てしまった。

『グギヤア、クリムゾンバースト』

そして、ウルムモンは紅色の炎をパートナーである筈の巧に向か  
って吐き出した。

「ちよつと、おい、止める！ウルムモン……」

『……誰だ、潰す、クリムゾンバースト』

「ちよつ、おい、嘘だろ……」

なんと、ウルムモンは巧すら分からなくなっていたのだ。

『グギヤアアア』

「……戦わなきゃいけないのか……そんなの……くそつ、どうすれ  
ば良いんだよ……」

迷いに満ちた本音を巧が呟いたとき、不意に二つの声が聞こえた。

「アホかお前、何しとんねん」

『ほんま、情けないな！』

「つ、誰だ！」

巧の目の前に現れた声の主は、同年代と思われる紺色の髪わたの少年  
と緑色の鱒わにの子供のようなデジモンだった。

「人に名前聞くときはそつちから名乗るんが礼儀ちやうんか？」

『というか今そんな状況ちやうやる』

「あ、ああ……」

（関西弁……）

「ほな、いくか」

『あいよ』

少年と鱒のようなデジモンは操られているウルムモンに向き直っ  
た。

そして、少年は巧達の持っているのと同じような銀と紫の銃を取り出した。

(……紫のD トリガー?)

「いくで、進化弾」

『ガビモン進化』

『ゲータモン』

進化の力を秘めた弾丸を受けた鰐、ガビモンは光り輝き、2と3メートルはある巨大な鰐、ゲータモンに進化した。

「……進化した?」

「何言うてんねん、驚くことちゃうやろ……ゲータモン来んで」

『分かっとなるわ』

『グアア、バーニンググライド』

ヴルムモンは炎を纏った翼でゲータモンを狙う。

『来いやあ、トレントテイル』

それに対して、ゲータモンは激流を纏った尻尾で迎え撃った。

『うおりゃー』

『グオオオ』

『……くっ』

『……グアッ』

翼と尻尾、それぞれに秘められた力はほぼ互角だったため、互いに数メートル弾き飛ばされた。

『なかなか、やるなあ、あいつ』

「おい、あいつは俺のパートナーなんだよ!」

「んなこと分かっつとるわ」

「だっつたら何で……」

それから、先の言葉は紡げなかった。

「何でつて……それやっつたら聞くけど、お前一体何しとつたんや？」

何ですぐ浄化したろうとせんかつたんや?」

「それは……」

巧にはその質問の答えが頭で分かっているも口に出して答えることが出来なかった。

「元に戻す方法知ってんのに何しとんねん。 本当にパートナー

を救いたかつたら、多少荒療治しても救おうとするんちゃうんか?」

「……っ!」

少年の言葉が刃物のように巧の心に切り込んだ。

(そうだ……ヴルムモンだつてこのまま操られているのは嫌な筈だ。

待ってるヴルムモン、必ず元に戻してやる)

「……俺も戦う」

「よっしや、分かった」

巧は遂にヴルムモンに立ち向かう決意をした。

『俺があいつをググツと引き付けとくから、そこでババツと撃つてくれや』

「あいよ」

「分かった」

『ほな、いくで、ハイドロストリーム』

先制攻撃とばかりにゲータモンは口から螺旋状の高圧水流を吐き

出した。

『……クリムゾンバースト』

高圧水流に気がついたヴルムモンは紅色の炎を吐き出して打ち消した。

「うし、いくで、強化弾、フライモン」

「デッドリースティング」

少年はD トリガーから麻痺性の毒針を、完全にゲータモンに注意が向いていたヴルムモンの右の翼に撃ち込んだ。

『グアツ……グ……グギャ……』

異変に気づいたヴルムモンが飛び上がって体勢を立て直そうとするも、右の翼を動かす神経が麻痺して飛べなくなっていた。

「今や！」

「ごめん、ヴルムモン、強化弾、モスモン」

「モルフォンガトリング」

巧はD トリガーから秒間100発もの弾丸を放ってヴルムモンを狙い撃ちした。

『グツ、ギヤアツ、グアアア』

「これで最後だ、ヴルムモン、浄化弾」

そして、巧は浄化の力と思いを込めた清らかな光を放つ弾丸をヴルムモンに撃ち込んだ。

『グアアアア………』

『巧、本当に助かった。ありがとう……本当にごめん!』  
「気にするな、俺もお前にちゃんと向き会えばお前を早く元に戻せたのにな……本当にごめん」  
「いや、とりあえず、丸く収まって良かったやないか」  
『そつやな』  
『……ところでこいつら誰だ?』  
「あ、そついやちゃんと自己紹介してへんかったな、俺の名前は………何やったっけ?」  
巧達は吉○新喜劇よろしく、ズッコケた。  
『何言うてんねん、お前の名前は、真治、倉木真治(くらき しんじ)や!』  
「そつやっただけ、ありがとな、えっと……カビモン?」  
巧達は立ち上がるうとしたところを足払いを食らったかのように再びズッコケた。  
『ちやうわ!俺はそんな汚いデジモンちやうわ』  
「ええ……じゃあカビゴ○?」  
『『それデジモンじゃなくてポケ○ン!』』  
巧達も思わずツツコンでしまった。  
『はあ、もう自分で言うわ……俺の名前はガビモンや、よろしゅう頼むわ』  
「そつやっただ、俺記憶力無いから……悪かったな、ゴ○ベ」  
『お前はもう黙れや!』  
『ハハ……えっと、俺はリオモンだ。正気に戻してくれてありがとう』  
「で、俺は巧、刃坊 巧だ、よろしくな」  
「ああ、よろしく、えっと……リオモンと巧……っ!」  
「おお……おい、どうした真治!」  
突如、真治が頭を抱えて苦しみはじめた。どこか、混乱しているようにも見えた。

「うつ……ぐあつ……た……くみ？……うつ……」

『おい、真治どないしてん？』

「ぐつ、はあはあ…… 大丈夫や、迷惑掛けてすまん」

「本当に大丈夫か？」

「ああ、ちよつと頭が痛なっただけや」

（何で急に……もしかして……いや、それより今やらなあかんことがあるんやっただけ）

「真治、本当に大丈夫か？」

「ああ、大丈夫や。それより巧、ちよつとお前に手伝ってほしいことがあるんや」

「俺に手伝ってほしいこと……？」

## 第五話「激流の大鱈」（後書き）

### キャラ紹介

金城 葉月 （かねしろ はづき）

光山中学校 二年

身長158cm。オレンジ色のセミロングの少女。充の妹だけあって、成績優秀。女子テニス部のエースと生徒会副会長を務める。

次期生徒会長最有力候補でもある。（というか、ほぼ内定）

間延びした口調が特徴。とある生物が大の苦手……

充と同じく、巧とは昔からの知り合い。言ってみれば幼なじみ。ちなみに、兄弟で髪色が違うのは、父親の髪色が黒で母親の髪色がオレンジで、それぞれ別に遺伝したからだという。要するに、某死神主人公とその妹（霊力の高い方）と同じ感じかと……

黄緑色のD トリガーを所持。

### ピクシモン

成長期 妖精型 ワクチン種

葉月の腰ほどの身長で、緑色の服に身を包み、背中から蝶のような羽を生やした金色の髪の少女のようなデジモン。

必殺技は光の輪を飛ばして攻撃する「ガリトラップ」と念力のようなもので物体を操る「フェアリーマジック」

これからもよろしくお願いします。

## 第六話「妖精の戦士」(前書き)

これで、オリジナルデジモン最後の成熟期です。  
あと、たまに無断で本文等を書き直しています。

この話を書く際にも葉月に新しい設定を加えました。そのため前話  
の後書きも少し変えました。

非常に勝手ですいません。

## 第六話「妖精の戦士」

洞窟から吹き出た黒い霧に包まれ、ウルムモンが暴走。ウルムモンと戦うことに躊躇い逃げていた巧が、真治とガビモンに遭遇したころ……

「 いやー、たくさん集まったねー」

「 そうですね」

『 これだけあれば十分でしょ』

『 わーい、わーい』

葉月、一也、ピクシモン、テリアモンは林で林檎のような果物や木の実を採集し、一也の持って来たバッグにいっぱい詰め込んで、充達のいる川の方に帰ろうとしていた。

「 …… やっぱり「あれ」は気のせいだったのかなー」

「 だと思えますけど……でも、あの運無し男ならもしかしたら……」  
葉月が気にしている「あれ」とは、採集中に、頭上を飛んでつたであろう二つの「何か」のことである。

勿論、運無し男こと巧とそのパートナーのリオモンのことである。

「 だってー、さっきからその飛んでつた方から爆音が聞こえるからー」

「 ……様子見に行きます?」

『 えー、嫌だよ一也ー、早く戻ろうよー』

『 だったら、アタシと葉月だけで見てくるよ』

「 いや、俺は……」

『 一也ー』

一也と、一也にしがみついているテリアモンを置いて葉月とピクシモンは爆音の聞こえる方へ行こうとしたが……

ピリリリリ〜

「……………っ！」

「嫌々な予感がするよ……………」  
葉月の嫌な予感は的中した。

『キシヤアア』

前方の二つの木の間に、黄色と黒の縞模様が特徴的な巨大な蜘蛛が現れたのだ。

『ドクグモン、成熟期のデジモンだね〜』

『成熟期でも皆で力を合わせれば大丈夫でしょ。ね、葉月』

「……………」

『葉月……………？』

突如、葉月が沈黙してしまった。

テリアモンとピクシモンにはその理由が分からなかったが、自称「金城葉月親衛隊隊長」こと、三条一也だけは瞬時にその理由が分かった。

「よりによって、何であんな姿のデジモンなんだよ……………」

そして、二匹のデジモンもすぐにその訳を知ることになった。

「……………いや……………」

『……………葉月？』

「い、いやああああ、でつかいクモオオオオ、ム、ムリイイ、嫌だ、嫌だ、ホワイ イズ ゼアー ス、スパイヤアアア！」

『ち、ちよつと葉月、どうしたの』

「やっぱりこうなった……………葉月先輩は、幼稚園の頃に蜘蛛二匹に顔面に張り付かれたことがあって以来、蜘蛛がトラウマになっているんだ」

『いや、でも普通あそこまで暴れないよ〜』

テリアモンの言う通り、葉月は奇声を発しながら、一人暴走していた。

『ちょっと葉月、落ち着いてよ』

「いーやあああー！」

『……ここはも〜僕達が頑張るしか無いね〜……一也？』

そのとき、一也の脳内にある一連の流れが浮かんだ。

（葉月先輩は実質戦闘不能 戦力は自分達だけ 活躍のチャンス  
上手くいけば……）

「グフフ……」

『お〜い、一也〜、どうしたの〜』

「っしやあ、いくぞ、テリアモン！虫退治じゃあー！」

『ちよつと〜……うわあ〜、一也まで暴走した〜』

今度は人間二人が暴走した……

「先手必勝、強化弾、イツカクモン」

「ハーブンバルカン」

一也は先制攻撃とばかりにホーミング弾をドクグモンに撃った。

ドクグモンの意識が、暴走している葉月に向いていて反応が遅れたため、ホーミング弾は直撃した。……が、

『……ボウヤ達何かした？』

「なっ、何だコイツ？」

ホーミング弾はドクグモンの体に触れると次第に腐りはじめ、最終的には跡形も無くなった。

『この体はあるウイルスに侵されていてね、触れたものを腐食させてしまうのさ』

「黒いもやか……」

『いんや、別物だ。この姿に進化したときからこういう体質だからね……』

『ガリトラップ』

どこからともなく光の輪が飛んで来てドクグモンに直撃した。

『ギシャアア、誰だ!』

『アタシよ、エネルギー系の攻撃ならその体質も意味無いよね……ちよつと葉月、しつかりしなさいよ!』

「……クモキライ、クモキライ……」

ピクシモンはそう言って、ドクグモンの目の前に現れた。

小言をブツブツ言っている葉月を懸命に引つ張りながら……

『何だ、愉快なお嬢ちゃん二人か』

『黙れ、クソババア、いや、クモババア! あんたがそんな姿してるせいで、葉月がおかしくなったじゃない!』

ドクグモンはピクシモンの話が最後まで耳に入らなかった。

ある言葉で一気に沸点を突破したからだ。

『ク、クモババアって何よお! ストレート過ぎるでしょうが!

というか何で言い直したの! いや、言い直さなくても、カ

チンってくるけど! ……もう、許さない! いけ、我が下僕

達よ!』

ドクグモンが叫ぶと、その背後から、ドクグモンをそのまま何十分の一に縮小したような姿をしたデジモンが二、三十匹程出てきた。

『うわあ、コドクグモンの大群だあ!』

ドクグモンの下僕、コドクグモン軍団は地面に降り立った。

その瞬間、

「でっかいクモから、ちっさいクモが……でっかいクモから、ちっさいクモ……ブクブク……」

……葉月が泡を吹いて気絶した。

『ちよつ、葉月、しつかりして!』

「先輩、先輩!」

『うわあ、葉月』

「……ブクブク……」

……葉月、戦闘不能。

『 いけ、コドクグモン軍団よ!』

『 『キシヤアア』』

ドクグモンの合図によりコドクグモンの大群が襲って来た。

「頼む、テリアモン、強化弾、ビットモン」

『 任せて一也、イヤーランサー』

テリアモンは硬化させた耳で、飛び掛かってくるコドクグモン達を次々と刺しては放り投げて、刺しては放り投げていった。

『 フェアリーマジック』

ピクシモンは念力でコドクグモン軍団をあっちこちに飛ばしていた。

『 チャーンズ、まずは私を見かけだけで判断して勝手に気絶した失礼な嬢ちゃんから……結構傷ついたんだから……ステインガーポレーション』

意外に繊細だったドクグモンは葉月に向けて、毒ガスを吐き出した。

『 ああ、もう、フェアリーマジック』

ピクシモンは念力で、ガスを何とか抑え込んでいたが、あまり長時間は持たなさそうだった。

『 いつまで持つのかなあ〜口の悪い嬢ちゃん』

『 11の……』

(葉月……)

「……………」

「で、手伝ってほしいことって何だ？」  
「それは後で教えたるわ。まあ、でもお前らにもメリットのあることや」

ブルムモンが正気を取り戻し、真治に「手伝ってほしいことがある」と言われた巧は前方を歩く真治に付いていつていた。

「何で、リオモン達を置いてったんだ」

巧の言う通り、真治はデジモン達に付いて来ないように言い、巧と二人だけで歩いていたので。

「これは、俺らにしか出来へん仕事やからな……着いたで」

「ここは……」

巧と真治の目の前にあったのは高さ3メートルはある巨大な洞窟だった。

そう、ブルムモンを暴走させた黒い霧が吹き出たあの洞窟だ。

「……何でここなんだ？」

「何でってか……まあ、お前が考えてることにすることや」

「……黒い霧か……」

「そういうことや」

(……うーん、私、一体……)

『……うう……っ！何これ、何なのよーっ！』

意識を取り戻した葉月は自分が置かれている状況に気が付いた。

葉月は蜘蛛の糸のようなもので木に縛り付けられていたのだ。

『アラクノハバト。お目覚めかい、嬢ちゃん。』

尻から出した糸でぶら下がっていたドクグモンが葉月の目の前に現れた。

「ヒーツ、蜘蛛おー」

「葉月先輩にそんな姿を見せるな！」

「……格好良いこと言ってるけど、僕達も糸に縛られて動けないんだよね。」

「いやあ、驚かせて悪かったね……嬢ちゃん、あんた人気者なんだね。悪いけど嬢ちゃんには一番最初に死んでもらうよ。ボウヤ達は手出し出来ないように縛ってある。……一番腹の立つあの口の悪い嬢ちゃんを除けば」

「葉月達を放しなさい。ガリトラップ」

突如、光の輪が飛んで来て葉月達を縛り付けている糸を断ち切るうとする。……が、

「来たか口の悪い嬢ちゃん、もうその技は効かんわ」

やたらと多い足を使い、ドクグモンは光の輪を叩き落とした。

「ピクシモン！」

「……あんたは自らのパートナーが死んで、絶望に暮れたところで殺すつもりなんだよ。でしゃばらないでくれる？」

「黙れ、クモババア！あんたの思い通りにはさせない！」

「その呼び方は止める！……状況分かってる？ 次勝手に動

いたら、パートナー、殺すわよ？」

「そんなこと……絶対にさせない！」

「ピクシモン……」

（ピクシモンは必死に助けようとしているのに、私は何してるんだろ……トラウマとかそーゆーのはもう関係無い！私だって……）

「……私もこんなところで諦めたくない！」

葉月がそう叫んだとき、腰のD トリガーが聖なる光を放ち糸を切り裂いた。その光を纏った葉月は静かに地面に降り立った。

そして、ある弾丸がD トリガーに自動で装填された。

『ギャツ……何だ？』

「この弾は……ピクシモンいくよ！ 進化弾！」

「ピクシモン進化」

弾丸を受けたピクシモンの体は光に包まれた。

そして光の中から現れたのは、身長百七十センチ程の、緑色のチユニツクを着た女性だった。左腰には荊トゲのようなデザインのレイピア（モン○ンのク○ーンレイピアに似た感じ）を携え、背に弓矢（同じくモン○ンのク○ーンブラスターに似た感じ）を背負っている。

「エルフモン」

「ピクシモン……いや、エルフモン、二人をー」

『分かった、ソーンスラッシュ』

『……っ、しまった！』

エルフモンは高く跳躍し、一也とテリアモンが縛り付けられている木に跳び乗り、レイピアで糸を切り裂いた。

「うう……情けねえ」

『……助かった』

『チツ……全員に逃げられるとは……こうなったら、まとめて地獄行きよ、ステインガーポレーション』

ドクグモンは口から大量の毒ガスを吐き出した。

『そんなのもう効かない。 スペルアロー』

エルフモンは弓に矢をつがい、放った。矢は魔力を螺旋状に纏い、毒ガスを払って飛んでいき、

『グ、ギアアア』

ドクグモンを貫いた。

「こーれーで、終わりよ、浄化弾」

葉月は浄化の力を秘めた弾をドクグモンに撃った。

『ギギ、グアアア……………』

『 いやー、助かりましたわ。ありがとう』

「ひいー、あんまりこっち来ないでー」

『……………やっぱり傷つきます』

ドクグモンの浄化に成功し、戦いは終わったかに見えた。が……………

ピリリリリリリ〜

「まさか……………ねえ」

そのまさかだった。

周囲の木々からドクグモンが数十匹程現れたのだ。

『ここはワタシ達ドクグモン族の住家ですから……………』

「もあー、嫌だああー」

葉月の絶叫が林にこだました。

「……………お……………だああ……………」

「……何か叫び声聞こえへんか？」  
「……ああ、聞こえる。というか、かなり知っている奴の声だと思う」

葉月の絶叫は巧達にも聞こえていた。

「……で、どこまで話したっけ？」

「黒い霧の発生源がどうとか……」

イビル・ミスト

「そうや、黒い霧……俺らは悪霧って言うてるけど、この付近の森や川での悪霧の発生源がこの洞窟の中にあるんや」

「とりあえず、その発生源とやらを何とかすれば良いんだな？」

「まあ……そういうことや。……ほな、始めよか。間違っても、

洞窟の中に飛び込もうとか考えんなよ。何起こるか分からんぞ」

「えっ……いや……そ、そんなことはし、しねえよ……」

非常に分かり易かった。

「あんなあ……こつからでもちゃんと狙い撃ち出来んねんから……」

「そんなこと何で分かんた……って、お前何でサングラス掛けてんだ？」

巧の言った通り真治はいつの間にかサングラスを掛けて、洞窟の奥を見つめていた。

「発生源を見つげんのに必要なやねん。お前も、頭に乗ってるゴーグル掛けてみたらどうや？ このサングラスと同じ力がありそうやし」

「え……あれ、本当だ。いつの間に……」

「いや、最初に会ったときから乗ってたけど」

デジモンシリーズ主人公のほとんどが装備しているアイテム、ゴーグルを「デジモンメモリーズ」主人公「刃坊 巧」も装備していた。……本人も、そして作者も知らなかったが。

「この世界に来る前は掛けてなかったよな……まあ、良いか」

そう呟いて、巧はゴーグルを掛けて洞窟を覗いた。

「……いつ！ 何だあれ……」

巧が洞窟の中に見つけたのは、鈍い輝きを放つ、高さ一メートル

くらいの黒いゲルのような物体だった。

物体は絶えず内部で流動していて、表面に浮かんでは消えていく模様は、苦悶の表情を浮かべる人間の顔にも見えた。

「あれが悪霧の発生源、悪核イビル・コアや。……って言っても、これが全ての根源って訳やないけど。……まあ、グロー……あの森周辺のはこれが原因や。近くの……何とかタウンのは別やけど」

「お前、本っ当に記憶力無いな……」

「浄化弾の効果は俺らの心に左右されることが多い。せやから、ありったけの思いを込めて撃つんやぞ」

「ああ、分かった」

「じゃあ、いくぞ……」

「「浄化弾！」」

巧と真治は悪核に向けて浄化弾を同時に撃ち込んだ。ほぼ同時に二つの浄化弾を撃ち込まれた悪核は白く輝いて四散した。そして、悪核があった場所から光の束が洞窟を突き抜け上空へ上がり、細かい光の粒となって降り注いだ。

「凄え……」

「成功や……」

同時刻、川辺にて

「 充、空を見て！」

「 あれは、何なんだろうね」

「 ……綺麗」

「 ですね」

同時刻、林（ドクグモンの住家）にて

「もぉー、何なのよぉー！」

葉月達はドクグモンの大群から逃げていた。

『こっとなったら、アタシが囷になって……』

エルフモンがそう呟いたその瞬間、

『ギシヤア、ギシイ……』

突如空から降ってきた、光の粒に当たったドクグモン達が動きを止めたのだ。

「何が起こってるんだ……」

『一也、ドクグモン達浄化されてるよ』

テリアモンの言う通り、光の粒を受けたドクグモンが次々に浄化され正気を取り戻しているのだ。

「ふうー、やっと本当に助かったー」

悪核を浄化し巧と真治はリオモンとガビモンのところに戻ってきた。

「手伝ってくれて助かったわ。ありがとう」

「いや、こっちこそいろいろ助けて貰ったから……真治、俺達と一緒に来ないか？」

「……ごめんやけど、ちょっと用事があるから無理や。でも、そのうちまた会えると思うわ……ほな、行くでガビモン」

『あいよ、真治』

そうして、真治とガビモンは何処へ去っていった。

「……………真治か……………」

真治達を見送った後、巧は首を傾げた

『どうかした、巧？』

「いや、何でも無い。ただ……………初めて会った気がしないんだ。

俺、あいつを知ってる気がするんだよな……………」

『ふーん、まあ、とりあえず他の奴らと合流しないと』

「……………そうだな」

## 第六話「妖精の戦士」(後書き)

### キャラ紹介

倉木 真治(くらき しんじ)

身長164cm。大阪の中学校に通う十四才の紺色の髪の少年。  
関西弁を喋る。極端に記憶力が無い。  
巧達とは別にデジタルワールドに来たため、何故、どのようにして  
来たのか等、不明なことが多い。  
紫のD トリガーを所持。  
実は……

### ガビモン

成長期 爬虫類型 データ種

緑色の体の、鱈わにの子供のような姿をしたデジモン。  
必殺技は口から螺旋状に水鉄砲を放つ「ハイドロショット」と、長  
い尻尾と大きな顎で攻撃する「テイルアンドタスク」

これからもよろしくお願いします。

第七話「犬と兎（前）」（前書き）

かなり遅くなりました。すいません。  
予想以上に長くなったので、今回は前後編です。

## 第七話「犬と兎（前）」

「みんな、大丈夫か？」

「あー、お兄ちゃんだー。」

休憩をとっていた葉月達の前に現れたのは、川にいた筈の充達だった。

「こっちは大丈夫だよー。……さっきは地獄だったけどー」

「……葉月、出たんだね。……蜘蛛」

「……うん。……とゆーか、何でここにいるのー？」

「いやあ、あつちでちよつとあつて、巧がこっちの方に飛んでつちやったんだ。「まあ、あいつなら大丈夫かな」って少し放置してたら、こっちの方で突然、光の柱が出現して空から光の粒が降って来たから、さすがに何かあつたんだろうつて思つて様子を見に来たつていうところかな」

「あーなるほど。……つて、やっぱりあれ巧とリオモンだったんだー！」

葉月の予想はばつちり当たっていた。

『やっぱりそうだったんだ』

『あのときはびっくりしました』

「プツ、ギャハハハいや、まさか本当だったとは、ハハハ」

「……クスクス……飛ばされたときは驚いて声出なかった……でも、思い出したら爆笑」

二名程爆笑。

「そんなに笑わなくてもー」

「さすがに巧に失礼じゃないか」

「……すいません」

「……はい」

葉月と充が指摘したのに珍しく、一也と三葉は不服そうだった。

「じゃあ、とりあえず巧のところへ行ってみようか」

「……くっ！」

充がそう提案した瞬間、一也と三葉は川の方向、つまり巧とリオモンがいる方向とは逆方向に走って行った。

『一也、ちよつと待ってよ』

『三葉、どうしたんですか？』

（何だよ、巧、巧って……そりゃドクグモン達の動きを止めたのも、巧だろうけど……俺だって、俺だって……）

（……ピクシモンも進化出来たようだったから……進化出来ないのはロップモンとテリアモンだけ……何でなの、何で私達だけ……）

『葉月、追いかけるわよ』

「分かったー。お兄ちゃんも早くー」

「分かったからちよつと待って」

そう言つて、充は携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

『何やってるの、充？』

「一応、巧に大体の位置を知らせておこうと思つて……」

その瞬間、一也と三葉の走るスピードが急に跳ね上がった。

「わー、さらに速くなったー。でもここつて圏外じゃなかったっけ」

「あ……」

充が思い出したかのように声を上げると同時にメールは巧に送信された。届く筈は無いと思われたが……

「……あれー、送信完了だつてー」

どうやら無事巧に届いたようだった。

「……多分、ここは僕達の世界とは別世界だから、僕達以外には使えなかったんだと思う」

パン

「え、なにー」

「びっくりするじゃないか」

突然鳴り響いた轟音に二人は思わず顔を上げた。

その目の前にいたのは、焦りと怒りが混じったような形相のピクシモンと、同じような形相で右手に持った拳銃を上に向けているガルモンだった。

『二人共何してんだよ!』

『そうよ! 一也達を速く追いかけないと!』

『「そうだった!」!』

かなり小さくなった一也達を何とか見つけ、充達も走り始めた。

「 はーはー、やっと追いついた! 」

川のところで葉月達はなんとか一也達に追いついたようだ。

「 何で急に走り出したの! 」

「 すいません……ただ、俺達が足手まといになってる気がして、いてもたってもいらなくて…… 」

「 何言ってるのよ!。そんなことないじゃない 」

「 ……でも、実際そうじゃないですか? 巧はいろいろと活躍してるし、先輩達のデジモンだって進化出来る……でも、私達は…… 」

「 そんなこと…… 」

ピリピリピリリ〜

「 ふう……その岩陰にいるのは誰かな? 」

充に指差され観念したのか、敵は岩陰から出てきた。

『 まさか気づかれるとは! 』

『 思わなかった……! 』

『 こつなつたら、実力行使! 』

話しているのは三体のように思えるが、実際は三面六臂さんめんろくつぽならぬ三面四臂さんめんよんぽの魔人型デジモン一体が話していたのであった。

「 はあ……こいつはアシユラモンっていうのか。魔人型の……か、

「完全体！？ 何だそりゃ？」

『成熟期の上の段階だよ』 強さも桁違いだよ』

「完全体か……」

成熟期の上の段階の存在、完全体に全員が警戒した。

『その通り』』

『我等は……』』

『アシユラモン！』

『闇に染まりし』』

『ミドルタウンの……』』

『町長だ！』』

『グローブフォレストの』』

『悪核が……』』

『消されたようだから！』』

『我等が』』

『消した奴を……』』

『倒しに来たのだ！』』

「……さつきから何なの？ その喋り方」

三葉が指摘した通り、アシユラモンの三つの顔が、ローテーションするかの如く代わる代わる喋っていたのだ。

『『名付けてローテーショントーク』』』

『何ですか、それ？』』

『ローテーショントークとは』』

『三つの顔が……』』

『順番に！』』

『代わる代わる』』

『話すことを……』』

『言っ！』』

「……くだらない」

『分かる人は』』

『分かる……』』

『主に関西圏！』

かなり変わり者の敵だった。

「ああもう、まどろっこしい！ こっちはイライラしてんだ。いくぞ、テリアモン」

『分かった〜、一也。 ブレイジングファイア』

「強化弾、トゲモグモン」

「ヘイルマシンガン」

テリアモンは緑色の炎で、一也はD トリガーからクリスタルの弾を撃ちだして、アシュラモンに攻撃を仕掛けた。

『おりゃ〜』

『だりゃあ………』

『でりゃあー！』

だが、アシュラモンは四本あるうちの一本の腕で炎を払い、残り三本の腕でクリスタルの弾を叩き落とした。

「くそっ………」

「……一也」

「三葉……よし、分かった。 テリアモン」

「……ロップモン」

「……（強化弾、ビットモン）」

『『ダブルイヤールンサー』』

テリアモンとロップモンはアシュラモンを前後で挟み撃ちにし、硬質化させた耳を逆立たせ、同時に飛び掛かった。

『挟み撃ちか〜』

『ぶっ………』

『はっ!』

しかし、アシユラモンはテリアモンとロップモンを、四本のうち二本の手でわしづかみにし、

『『『おりゃあ』『』』

『うわ〜』

『うわっ』

投げ飛ばした。

「ガルモン、僕達もいくよ」

「ピクシモン、私達もー」

「進化弾」

『ガルモン進化』

『リガルモン』

『ピクシモン進化』

『エルフモン』

「みんな、いくよ。強化弾、シードラモン」

「アイスアロー」

充はD トリガーから円錐状の氷の弾を撃ち出した。

『テイルランチャー』

充に続いて、リガルモンは尻尾のマシガンから弾を連射した。

「強化弾、アクィラモン」

「ブラストレーザー」

さらに、葉月はD トリガーからリング状の光線を発射した。

『スペルアロー』

そして、エルフモンは魔力を纏った矢を放った。

『『『すう……阿修羅神拳！』』』

対してアシュラモンは四本の腕でパンチのラッシュを繰り出して  
対抗した。

『 今のは』

『 なかなか……』

『 効いた！』

『 これが……完全体の力か……』

さすがに何発かはアシュラモンに当たっていたが、どれも浅く、  
たいしてダメージは与えられなかった。

『 次は』

『 一体……』

『 どうするつもりだ！？』

『 みんな、ここは引こつ』

『 え、どうしてですか？』

「力の差は歴然だ。巧が合流してからもう一度戦おう。 　　もしか  
したら、戦わずに済ませる方法もあるかもしれない」

「また、巧、巧って……くそっ」

巧の名が心に引つ掛かった一也はアシュラモンの前に飛び出した。  
「ちよっ、一也……くそ、強化弾、ディグモン」

「ビッグクラック」

充はD トリガーを地面に向けて弾を発射し、そこから地割れを起こしてアシユラモンの周囲の地面を隆起させ、閉じ込めた。

「これで足止めしているうちに逃げて……」

「うおお、強化弾、トゲモグモン」

「ヘイルマシンガン」

一也はアシユラモンに向けてクリスタルの弾を撃ち出した。

『痛いな〜』

『この……』

『うおりゃあ！』

アシユラモンは掛け声と共に立ち上がり、全弾殴り落とした。

「くっそ、この……」

「一也くん」

「……は〜い 葉月せんぱい、何ですか〜？……って、うわっ  
！」

葉月に呼びかけられ、顔だけでなく体全体が綻んだ一也は、リガルモンに軽く上に上げられ、リガルモンの背中に乗せられた。

「じゃありガルモン、頼んだよ」

『分かった、一也達はオイラに任せろ』

そう答えたりガルモンの背には、一也、テリアモン、三葉、ロツ  
プモンが乗っていた。

「えっ、ちよつと……」

「私達は一也君達を信じてるから……」

「いや、ちよつ……うわあー」

リガルモンは二人と二匹を乗せて駆けていった。

『人間二人と〜』

『成熟期一体で……』

『我等に対抗出来るとても!』  
「時間稼ぎくらいは出来るさ……」

『ここまで来れば大丈夫だろ』

川から少し下った脇の林でリガルモンは、一也、テリアモン、三葉、ロップモンを降ろした。

「リガルモン、何で先輩達だけ置いてったんだ!」

憤りが収まらない一也はリガルモンに問い詰めた。

『充の指示だ。元々は葉月も一緒に来るつもりだったんだが、葉月とエルフモンも足止め役にまわると言って……』

「……やっぱり私達は足手まといなんだ……」

リガルモンの話を聞いて、三葉は呟いた。

『違う! 充達はオイラ達のことを信じてアシユラモンを足止めしてくれたんだ!』

三葉の呟きに、思わずリガルモンは強く否定した。

『……少し静かにしてください』

『何か来るよ』

テリアモンとロップモンの言う通り、近くから足音が聞こえてきた。その足音の主は独り言(?)を呟いていた。

『このデジモン達』

『なかなかやる奴だった……』

『ミドルタウンの!』

『悪霧の力で』

『我が同士として……』

『向かえよう!』

「くそ……」

「うー……」

『う……』

足音の主は両脇に充と葉月を抱え、上側の二本の腕でピクシモンを上に掲げて歩くアシユラモンだった。アシユラモンは、すぐそばの茂みや木に隠れた一也達には気づかず、下流に向かって歩いていった。

『これはマズいことになったな……』

## 第七話「犬と兎（前）」（後書き）

キャラ紹介

三條 一也 みつじょう ひとしや

光山中学校 一年

身長156cm。一年でありながら、男子テニス部のレギュラー兼生徒会会計を務める金髪の少年。

父親はIT業界で、大成した社長で家は金持ち。

父親は日本人だが、母親は日本とイギリスのハーフ。つまり、一也はクォーター。

テニス部のレギュラーは自力で取ったが、本来一年はなれない筈の前期生徒会役員になれたのは、マナーの力だという噂が……

幼稚園の頃に知り合っただけで、葉月が大好きで、自ら「金城葉月親衛隊長」を名乗っている。当然テニス部に入ったのも、生徒会に入ったのもそこに葉月がいるから。（部活や仕事自体は、金城兄妹には劣るもののちゃんとしている）

緑色のD トリガーを所持。

テリアモン

成長期 獣型 ワクチン種

頭部に1本角を生やした獣型デジモン。稀に双子で誕生するという噂も存在する。非常に可愛いタイプの子デジモンで、ゆったりとした行動からはとても「戦闘種族」としてのデジモンを実感することができないが、戦闘の際には、その見た目以上のパワーを発揮する。得意技は両耳をプロペラのようにして小型竜巻を起こす『プチツイスター』。必殺技は高熱の熱気弾を吐き出す『ブレイジングファイア』。また、双子の片割れであるといわれるロップモンとの合体

技である『ダブルタイフーン』も強力な威力を持つという。

テリアモンの説明は公式のを少しいじりました。

第八話「犬と鬼（後）」（前書き）

……あれ、何でこんな終わり方になったんだっけ？

## 第八話「犬と兎（後）」

「あいつらどこ行ったああああ！」「シードラモンが出た辺りで待ってる」とかメール送って来たの充だろぅがああ！……俺、結構頑張ったんだけど……放置プレイってどういうことだああああ！」

『うるさいなー。上でギヤーギヤー喚かないでよ、巧』  
アシユラモンが去った少し後に川辺に着いた巧はヴルムモンの背に乗ってブチ切れていた。

充達に何があつたかも知らずに……

「だってよー、ただでさえ一也と三葉にボロクソ言われてるのに、充達にまでに酷い扱いされたら俺どうすりゃ良いんだよ……」

『はいはい、巧には俺がいるだろ。だから、落ち着けて』

「ヴルムモン、お前……！……なあ、何か前方から蜂みたいなのがジモンの大群が来てるんだが……」

『ああ、それも何か敵意剥き出しの奴らが……』

ヴルムモンがそう同意したとき、D トリガーがけたたましく鳴り響いた。

『我等はフライビーモン軍団だ。ミドルタウンで自警団をしていた。ここの悪核を破壊した実力を認め、こちらから出向いてやった。感謝しろ』

「『ありがた迷惑だああ！』」

『このままじゃ大変なことになる。早く助けに行こう』

仲間の危機にリガルモンが立ち上がるうとするも、

「俺は……」

「…………私達じゃ…………」

「一也と三葉は踏ん切りが着かないでいた。」

『…………もしかして、また足手まといになるとか思っていないよな。』

…………逃げる前に葉月は言ってたよな、「信じてる」って。…………これは本当に足手まといだと思ってる奴に言う台詞か?』

(葉月先輩が俺を信じてくれてる…………)

(…………私は足手まといじゃないんだ…………)

『僕は一也が本当にやりたいようにすれば良いと思うな』

「テリアモン…………」

『私も三葉にならずと付いて行きます。』

「…………ロップモン…………」

「俺は…………」

「…………私は…………」

「…………(…………)先輩達を助きたい!」

二人の心が決意を決めたとき、二人のD トリガーが輝き、弾が自動装填された。

「テリアモン!」

「…………ロップモン!」

「…………(…………)進化弾!」

『テリアモン進化』

『ロップモン進化』

「…………アシユラモンは一体何をするつもりなんだろう…………」

「大丈夫かなー、ピクシモン…………」

充と葉月はミドルタウンの教会の中で十字架に縛られていた。D

トリガーは奪われ、籠に入れられて、今はアシュラムンの左下の  
手が持っていた。アシュラムン（阿修羅）なのに何で教会なの  
かという件については、充がアシュラムンに一度質問したが、  
細かい〜』

『ことは……』

『気にするな!』

と一蹴(?)されてしまった。

『ちよつとアンタ、一体何する気なの?』

『すぐに〜』

『分かるから……』

『喚くな!』

『……チツ……』

ピクシモンは両手を後ろに縛られ、アシュラムンに押されて、一  
つの扉の前に立たされた。

『この扉の奥には〜』

『悪霧の発生源……』

『悪核があるのだ!』

鍵を右上の手の指で回しながら話すアシュラムンの言葉により、  
充達はアシュラムンの真意を知ってしまった。

「悪霧つてまさか……黒いもやか!」

「そんなー……ピクシモン!」

『よつこそ〜』

『秘められし……』

『悪意の内へ!』

『そうはさせない!』

その声と共に教会の入り口の扉を突き破ってリガルモンが教会内  
に突入した。

「リガルモン!」

『お前も〜』

『闇に……』

『支配されに来たのか!?!』

『そんなつもりは毛頭無いし、来たのはオイラだけじゃない!』

そのとき、教会の左右のステンドグラスが割れ、両側から二体のデジモンが突入した。

突入した内の一体、ジーンスを履いている獣人型デジモンは、両手のガトリンググアームで鍵を持っている手を狙い撃ちして鍵を破壊した。

突入した内のもう一体、胴着に身を包んだ獣人型デジモンはその両手に装備した兎角鉄爪とかくつそつでD トリガーが入った籠を破壊し、D トリガーを奪い返した。

『この〜』

『貴様らは……』

『一体何者だ!?!』

『僕はガルゴモンだよ〜』

『私はトウルイエモンと申します』

『一体何者なんだ……』

『でも見たことのある気が〜』

謎のデジモンの襲来にアシュラムだけでなく、充や葉月も驚いていたが……

『……充先輩、助けに来ました』

『三葉!』

『葉月先輩、あれはテリアモンが進化したガルゴモンと、ロップモンが進化したトウルイエモンです』

『一也君、進化出来たんだ〜』

デジモン達による騒ぎの中で、密かに侵入していた一也と三葉によつて、二人は真実を知り、同時に解放された。

『充、葉月、これを……』

『よし!』

『ありがとう〜』

トウライエモンによって、二つのD トリガーは持ち主の元へ戻った。そして、

「いくよ、ピクシモン。進化弾」

「ピクシモン進化」

「エルフモン」

進化によって、手を縛っていたロープもちぎれ、全員が解放された。

『この〜』

『責様ら………』

『許さん!』

『こつちだつて〜』

『負けません!』

アシユラモンとの再戦は熾烈を極めた。

『我等は〜』

『完全体………』

『成熟期四体と!』

『人間四人が〜』

『相手でも………』

『負けはしない!』

「成熟期とか完全体とかは関係無い!」

「……私達は負けない」

『ソーンスラッシュ』  
『カントレット巖兎烈斗』

エルフモンとトゥルイエモンが接近戦に持ち込み、

『テイルランチャー』

『ガトリングアーム』

リガルモンとガルゴモンが遠距離から隙間を縫って銃撃を仕掛ける。

「……………技能弾、ポンチヨモン」

『テキーラナックル』

三葉達はその状況に応じて、技能弾を撃ち込みデジモン達をサポートしていた。

アシユラモンは四本の腕を巧みに使って攻撃に対抗し、

『『『阿修羅神拳！』』』

凌ぎ切れないときは必殺技を使い応戦していた。

『さすがにここまで来れば大丈夫だろうな！』

そんな激しい戦いの中、間抜けな声が聞こえてきた。

「ちよっ、ヴルムモン、前、前！」

『えっ、あ、やばい……………』

「ああもう、技能弾、プテラノモン」

『うわああ、ビークピアス』

絶叫と技名と共に教会の天井を突き破って、背に人間を乗せたデ

ジモンが飛来してきた。そして、

『え〜』

『ちよっ……………』

『ぐばあぁ〜!』

アシユラモンに突撃し、

『……………うう〜』

『くそ……………』

『無念!』

KOさせた。

「……………」

「……………はあああああ!?!」

突撃してきた人間とデジモン、巧とヴルムモンと気絶しているアシユラモンを除く全員が絶叫した。

「マジで何なんだよ。何その良いところ取り!」

「え……………何がどうなって……………」

「……………マジくたばれ!失せろ! DOSIMRE! (ドブに溺れて死んで、生き返ってまた死ぬループを永遠に繰り返せ!)」

「ちよっ……………言い過ぎだって、てか最後のデージーのパクリだろ……………」

「いや、改造版!?!なあ、充、葉月、お前達も何とか言ってくれよ……………」

「……………」

返事が無い。完全に無視されているようだ。

「え、ちよっ……………なあ、お前ら、ガルモン達の成熟期だろ、お前らも頼むよ……………」

『……………』

返事が無い。完全に無視されているようだ。

「え……………ははは……………心配してた通りになったあ!」

『俺は巧の味方だ……』

「ヴルムモン、お前……」

「見つけたぞ」

そのとき、フライビーマンの大群が教会に侵入してきた。

「（……）マジで何してんだ、てめえらああ！」

『熱戦の止めをあんな形で刺してすいませんでした。』

ザッ

「そのうえ、フライビーマンの大群までも連れて来てすいませんでした。」

ザザッ

『「だから、手を貸してください。お願いします。」』

シャキーン

「はあ…分かったよ」

「私達もやり過ぎたしねー」

状況を理解した巧とヴルムモンによる芸術の域にまで達した土下座によって、何とかみんな許してくれたようだ。その間、フライビーマン達は一也と三葉の叫びに気圧されて、動けずにいた。

『え、えーい。全員かかれ！』

何とか復活したフライビーマン達は一斉に襲い掛かって来た。

「ヴルムモンやりガルモン達はいつらを抑えててくれ……ません

か」

『分かった……他の方も手伝って頂けますか？』

『もう良いから……』

五体のデジモンはフライビーマン達を抑えに掛かった。

「あつちは数が多過ぎるよー」

「元を絶たないと……悪核の場所さえ分かれば……」

「悪核だったつけ。それなら、あの扉の奥にあるってアシユラモンが言ってたよ」

「本当か？」

充の発言を聞いて、巧はゴーグルを掛け直した。

「……確かにあった。みんな、自分の身の回りを探ってゴーグルがサングラスがあつたら掛けてくれ。俺は……強化弾、トータモン」

「シエルフアランクス」

巧はD トリガーから刃状の岩の弾を撃ち出して、扉を粉碎した。

「掛けたぞ、間抜け……って何だ、あれ」

「……いや」

「気色悪うー」

「見てるだけで嫌な感じだな」

「……あれが悪核だ……って、全員サングラス？ ゴーグル俺だけ？」

真治もサングラスだったので、ゴーグルは巧だけだった。

さすが主人公。

「なんか、俺だけ仲間外れ……まあ良いや。みんな、あれに浄化弾を撃ち込めばこの周辺のデジモンは解放される。浄化弾は俺達の心に左右されることがあるらしいからな、ありつたけの想いを込めろよ……いくぞ」

五つの銃口が禍々しき物体へと向けられる。そして、

「……」「浄化弾」「……」

五筋の光はやがて大きな光となって、悪核を貫いた。すると、悪核は白く輝いて四散した。

そして、悪核があつた場所から光の束が上空へ上がり、細かい光の粒となって降り注いだ。

「これで、終わりだ……」

「 倉木真治か……確かに知ってる気がしないでも無いな。何でだろう」

「私も言われてみればそんな気がする」

「名前は聞いたことがあるような……いやでも……」

「……かなり昔に聞いたような気がしないでも無い」

「そうか……分かった」

ミドルタウンを悪核から救った巧達はアシュラモンの誘いで、ここで一日過ごすことにした。アシュラモンはミドルタウンに悪霧が広がるのにいち早く気づいて町民を教会の地下に避難させたため（地下への入り口が悪核より少し遠く地下の天井と壁が頑丈だった上に、律儀に誰もそこから出なかつたため、地下内での悪霧の感染者は奇跡的にゼロ）、町民も全員戻り、すぐに町は元の活気を取り戻した。（教会に関しては知るか！）

とりあえず、一段落着いたので、巧は洞窟で真治とガビモンに会ったことをみんなに話していた。真治に初めて会った気がしなかった自分の感覚が正しいのか探る意味も含め。

（やっぱり、知ってる筈なんだよな。真治って何者なんだ？）



## 第八話「犬と兎（後）」（後書き）

キャラ紹介

三条 三葉（さんじょう みつば）

光山中学校 一年

身長156cm。一也の双子の妹。

一也と同じく、父親は日本人だが、母親は日本とイギリスのハーフ。つまり、三葉もクォーター。

外見の大きな違いは髪の長さ。（一也はこめかみまで。三葉は腰にかかる長さ）基本物静かだが、意外と毒舌。充が絡むときや、毒を吐くとき（主に巧）は饒舌。

雰囲気は双子である筈の一也と対極的だが、基本的な行動原理は似通ったことが多い。（葉月が充に変わっただけ）

やはり、女子バスケット部に所属し、生徒会役員（書記）でもある。（一年が本来なれない筈の生徒会役員になれたのは、一也と同じくマネーの力だという噂が……）

一也と双子だからか、意外と運動神経が良い。

桃色のD トリガーを所持。

ロップモン

成長期 獣型 データ種

非常に貴重な双子デジモンの成長期。3本角を生やしているのがロップモン。テリアモンはゆったりした性格ではあるが、非常に元気がある。それに対し、ロップモンは泣き虫の寂しがりやと対照的な性格をしている。得意技は両耳をプロペラのようにして小型竜巻を起こす『プチツイスター』と合体技の『ダブルタイフーン』。必殺技

は冷氣弾を放つ『ブレイジングアイス』。

ロップモンの説明もテリアモンと同じく、公式のを少しいじりました。

## 第九話「奴との再会」(前書き)

一ヶ月以上、更新しなくてすみません。次もいつになるか……  
とりあえず、8月1日という記念すべき日(太一達、選ばれし子供  
が初めてデジタルワールドに行った日)のうちに更新できて良かつ  
たです。

非常に長くなりました。

## 第九話「奴との再会」

ミドルタウンを出た巧達は、再び川に沿って歩いていた。

『ね、何でまた川に沿って歩いてるんだっけ』

「それはー、町を出るとき、急に巧のD トリガーの銃口からレーザーみたいなのがでて、こっちの方向を指したからだよー」

「そ、特に次の行き先も決めてなかったしな。……って、うわっ、ぶへっ」

話しながら、歩いていたら、巧は道にあった「何か」に足を取られ、顔面から地面にダイブしまった。

「痛って、誰だよ、こんなところにゴミ捨てたのは……」

「グボツ、……だ、誰がゴミや……ガクッ」

「って、真治い〜！」 巧に蹴り（？）をかまされ、ゴミ呼ばわりされたのは、なんと真治だった。

「……って、真治ってこんな奴だったのかああ！」「」「」

謎の人物のあまりにも情けない登場の仕方に、真治に初めて会った全員がシャウトした。

『もう、何してんねん、真治。お前が腹減った言ったから、俺が何か採って来る間待つとけって言ったのに……おく、巧やん。また会ったな〜。……って、大丈夫か！ お前、顔血だらけやぞ』

ガビモンの指摘通り、巧の顔面には無数の切り傷が出来て、そこから、血がだらだらと垂れていた。少しホラーだった。

「えっ、マジで……あー、そーいやこけたとき、かなり痛かったもんな。でもって、よく見たら俺の顔があった辺りの石全部、尖った部分が上向いてる。……あれ、ちょっと、みんな、何で距離取ってるんだ？」

高速で後ずさりしながら一也達は思った。

こんなアホ丸出しな奴らに助けられた俺達って一体……？、と。

「いやあ、ホンマに助かったわ。おおきに。……えつと……イモ山？」

「いや、イモ山って誰だよ。俺は巧だ、刃坊巧。分かんないんならせめて分かんないって言うてくんない。勝手に変な名前付けんな」  
案の定名前を忘れられていたイモ山改め、巧が呆れながらツツコんだ。

尚、巧の顔の傷は全て浅かったので、包帯でミイラになるとかそういうことはなかった。

「あ、すまん。にしてもホンマにまた会うとはな。巧とそのパートナーの……すまん、どちら様やったっけ？」

「はい、素直でよろしい。自分のパートナーの名前も忘れる奴が人のパートナーの名前を覚えてる訳無いもんな。俺はリオモンだ。覚えるとは言わねえよ」

「いやあ、ありがたいわ。覚えんの苦手やから。アハハハ」

リオモンは皮肉を込めて言ったつもりだったが、真治は全く意に介していないようだ。

「それで、お前らと一緒におんのは仲間やんな？」

不意にガビモンが尋ねた。

「ああ、そうだよ。僕は金城充。よろしくね」

「オイラはガルモンよろしく」

「充にガルモンと……っ！ぐあつ、くっ……」

突然、真治が頭を押さえて苦しそうに呻いた。巧と会ったときのよう。

「おい、大丈夫か。何でまた……」

「……ああ、大丈夫や。続けてくれ」

「……三条三葉（……いつそのことくたばれば良かったのに）」

『ロップモンです。本当に大丈夫ですか？』

「ああ、大丈夫や。全然元気や。三葉にロップモンと」

「俺は三葉一也。三葉とは双子だ」

『テリアモンだよ。本当に大丈夫？』

「大丈夫やって（軽い奴やな）。一也にテリアモンと」

「大丈夫そうだねー。私は金城葉月。充お兄ちゃんの一つ下の妹だよー」

『アタシはピクシモンよ』

「最後、葉月にピクシモンと……っ！くっ、ぐああ……頭が……やつぱり……知って……」

葉月とピクシモンの名を復唱した瞬間、再び真治が頭を押さえて苦しみ出した。

「ちよつと大丈夫ー。もしかして私のせいなのー」

「そんな訳無いです！葉月先輩のせいじゃないです。てか大丈夫だよな、真治。大丈夫だよな！」

「お前な……おい、本当に大丈夫か、真治？」

「はあ、はあ……すまん、大丈夫や」

『真治、またか……本当に大丈夫か？（ひよつとしたら……いや、まさかな……）』

「ああ、もう大丈夫や」

とりあえず、落ち着いたようだ。

「そついや、あのとき言つてた用事つて何だつたんだ？」

「ああ……いや、別にそんな大したことや無いんや。ちよつと、色々調べてただけや」

「ふーん、……なあ、また会つたのも何かの縁だし、一緒に来ないか？ みんな、別に良いだろ？」

急に、巧は真治を仲間に引き込み始めた。

「いきなり何を言い出すかと思えば。まあ、僕は賛成だけど」  
『オイラも』

「……充先輩が言うなら」

『私も賛成です』

「私も賛成だよー」

『アタシも』

「葉月先輩の意見に賛成」

『僕も賛成』

「え、いや俺まだ何も言うてへんけど……まあ、ええか。なあ、ガビモン」

『え、それは、止めといた方が……』

「ん、何でや？何かまずい理由でもあるんか？」

『それは……いや、やっぱりさつき言ったことは忘れてくれ。俺も賛成や（まだ推測通りと決まった訳や無いしな。大丈夫やろ）』

「ガビモンも変な奴ぢゃなく。まあ、ええか。じゃ、改めてよろしく頼むわ」

こうして、真治とガビモンが仲間に加わった。

「で、俺らはどこに向かってるんや？」

「……知らない」

「いや、知らんてどういうこと!？」

「……だまれ」

「え……いや、何かすんません」

三葉のたつたひらがな三文字の言葉に込められた圧力で、真治は思わず謝ってしまった。真治に非はなかったのだが。

『私が説明します。三葉が言った通り、どこに向かっているかはわかりません。というのも、急に巧のD トリガーから放たれた光が指し示す方に向かっているだけなので……』

「何やかなりアバウトな行き先の決め方やな。まあ、ええわ。……そういや、この先に何かがあるか、俺ら知らんかったっけ？」

『あゝ、あ、思い出したわ。確か、この先にはコーストビーチつちゆう砂浜があったわ。眼前にはコバルトブルーの海が広がっていたらしいで』

「……海……」

平仮名にして二文字、漢字にして一文字の言葉に全員が色めき立った。

特に、その中の一人、一也は、

「海といえば水着。葉月先輩の水着姿……ブハアッ」

『ちよっ、一也。いきなりどうしたの〜』

興奮の余り、鼻孔から赤い液体を大量に放って、背中から倒れた。ようするに、自滅した。

「こいつ、大丈夫か……」

真治が情けない一也の姿に呆れているとき、充は小声でガビモンに自らの疑問について聞いていた。

「ねえ、ガビモン、確か『海が広がっていた』って、言ったよね。

何で、過去の出来事のように言ったのかな？」

『充はなかなか気づく奴やな。……実は、何年か前に、海上に基地のような、工場のような建物が急に建ったらしいんや。それから、次第に海の水が濁っていったらしいんや。今では、悪霧に吞まれたデジモンもうろついているらしいわ……』

「そうだったのか……みんなに話すのは後で良いか」

『いや、今言ったら良いやん』

「でも、着くまで言わない方がおもしろそうだし」

『え、いやでも……』

「まあまあ」

何となく、充の裏の面を感じたガビモンだった。

ピリリリ〜

「な、何だ？ 敵か？」

突然、六人のD・トリガーが鳴り響いた。 とうやら、敵の襲来を察知したようだ。

『あゝもう、ピリピリうるさいわよ！』

さすがにD・トリガーが六つも鳴ると、騒音のレベルに達するようだった。『おい、来るで』

ガビモンが言うと同時に崖の上から三体のデジモンが落ちてきた。そのうちの一体、幻獣のユニコーンを彷彿させる姿のデジモンは背の翼で、ゆっくりと落ちるといふより降りてきた。

「ユニモン、成熟期か」

もう一体、片腕が銃と一体化した、四本の脚をもつデジモンは、こちらは落ちるといふより崖を駆け下りてきた。

「ケンタルモン、こっちも成熟期やな」

最後の一体、こちらも片腕が銃と一体化した二本の足で体を支える牛のようなデジモンは、着地した地面を少し陥没させ、まさに落ちてきた。

「……………ミノタルモン、成熟期」

『こいつらだな』

『ああ、標的ターゲットで間違いない』

『さっさと潰すか』

ユニモンは完全に巧達に敵意を向けていた。

「悪霧か……………みんな、いくぞ」

「……………進化弾」

『リオモン進化』

『グルムモン』

『ガルモン進化』

『リガルモン』

『ピクシモン進化』

『エルフモン』

『テリアモン進化』

『ガルゴモン』

『ロップモン進化』

『トゥルイエモン』

『ガビモン進化』

『ゲータモン』

巧達はそれぞれのパートナーを進化させて、ユニモン達に相対した。

「エルフモン、空を飛べたり出来る？」

「まあ、多少空に浮かぶくらいなら出来るけど。充、それがどうかした？」

「……よし、分かった。巧、葉月、ヴルムモンとエルフモンでユニモンを頼む」

「分かった」

「オッケー」

「一也、三葉、君達とガルゴモン、トゥルイエモンで残り二体のう

ち一体を頼む。君達の連携を活かしてくれ」

「分かりました（いずれ義理の兄となる方、ここは従おう）」

「……分かりました。じゃあ、私達はミノタルモンを」

「ほな、俺らはケンタルモンか。……俺らとお前らを組ませたのも何か理由があんのか？」

「まあね。君達の手も知っておきたいからね」

「ほづ……」

『おい、馬もどき。俺達が相手だ』

『ユニコーンだと思っけど……』

「角二本だったらバイコーンだねー」

「あゝ、うん。いや、今関係ないだろ。」

巧、ウルムモン、葉月、エルフモンは、低空飛行していたユニコーンの正面に現れた。

「……って、あれ？ 何でエルフモンがユニコーンを……」

「知ってるんだ？」とまで、巧は言うことが出来なかった。

『いつまで話してるんだ！ ホーリーショット』

放置プレイに痺れを切らしたユニコーンが口から気功弾を放ってきたからだ。

『いきなりかよっ。クリムゾンバースト』

気功弾に対してウルムモンは紅色の炎を吐き出して、気功弾を打ち消した。

「俺達もいくぞ。強化だ……ん、あれこんな弾のデータあったか？」

巧がヴルムモンの背に乗り、D・トリガーを操作して弾を選んでみると、以前より明らかに弾のデータが増えているのに気づいた。

「私のもだー。……あ、初めて見るのは全部完全体のデータだー」

どうやら弾のデータが増えていたのは巧だけでは無かったようだ。

「全員のデジモンが進化出来るようになったからか？ ……とりあ

えずいくぞ。強化弾、キャノンビームン」

「私もー。強化弾、リリモン」

「ニトロステインガー」

「フラウカノン」

巧と葉月はD・トリガーからそれぞれ、レーザーとエネルギー弾を撃ち出した。

ユニモンはその飛行能力で避けようとする。が、間一髪レーザーを避けた、その直後にエネルギー弾が炸裂し、ユニモンを上空に吹っ飛ばした。

『クツ、ガアア』

「さすが完全体、なかなかの威力だな」

「でも、倒した訳じゃないよねー。……エルフモン、ちょっと良いかなー」

『何、葉月……』

葉月は何か思いついたらしく、エルフモンに耳打ちし始めた

『許さんぞ！ ホーリーショット』

激昂したユニモンは空中で体勢を立て直し、気功弾を乱射し始めた。

『にやろっ。バーニンググライド』

ヴルムモンは炎を纏った翼で気功弾を弾き返す。が、次第に弾き返せなくなってきた。

『ぐっ、くそ……』

『くたばれえ！』

『そうはさせない』

そのとき、何かが気功弾を切り裂きながら、階段を駆け上がるかのように上空に現れた。

『なっ……』

『空気を固めて浮く力と高い跳躍力を活かすやり方か。葉月も考えたじゃない。……で、あんた達アタシ達のこと忘れてない？』

現れたのはエルフモンだった。

『ちっ、ホーリ……』

『遅い、ソーンスラッシュ』

エルフモンはレイピアでユニモンを斬りつけ、地上に落とす。

「いくよー、エルフモン。技能弾、サジタリモン」

『ジャツジメントアロー』

エルフモンは超金属クロンデジゾイド製の矢を弓につがい、二度放った。

『グアツ、ガアア』

二本の矢はユニモンの両翼を射抜き、地面に突き刺さった。

「ラストー、浄化弾」

地面に固定されたユニモンに葉月は清らかな弾を撃ち込んだ。  
『クッ、うっ……』

『 ハンティングキャノン』  
『 ハイドロストリーム』

ケンタルモンは右手と一体化した銃からエネルギー弾を発射し、それに対してゲータモンは口から高圧水流を吐き出して迎え撃つ。しかし、次第にゲータモンが押されていった。

『 ちっ、くそが』

ゲータモンは体を横にずらし、高圧水流を打ち破ったエネルギー弾を避けた。

「 やっぱりあの銃、結構威力あんな〜」

「 あの四本脚で機動力もあるしね。バランスの良いデジモンだね」  
『 分析は良いから。来たよ！』

『 もう、遅いわ』

その一瞬の間にリガルモンの目の前にケンタルモンが現れた。  
『 やばっ……………』

『 遅い。ジェットギャロップ』

ケンタルモンは二本の前脚でリガルモンを思い切り蹴飛ばした。  
『 がはっ……………』

『 リガルモン、大丈夫……………』

『 お前もだ！ ジェットギャロップ』

ケンタルモンは四本の脚でゲータモンの真横に移動し、再び二本の前脚で蹴飛ばした。

『 ぐはっ……………』

「大丈夫か？ ゲータモン、リガルモン」

「ああ、大丈夫や」

「結構痛かったけど」

「おかしい……奴はなんで、あそこでああしたんだ？」

充は何かが引つ掛かっていたようだった。

「……そろそろか」

「……っ！」

が、ケンタルモンがこぼしたこの一言でその引つ掛かりは解けた。「そういうことか！ だったら……みんな、あいつから距離を取って攻撃してくれ」

充は何か思い付いたらしく、リガルモンの背に跨がり、指示を出した。

「オツケーや。強化弾、メタルグレイモンモン」

「ギガデストロイヤー」

「俺もいくで。ハイドロストリーム」

真治はD・トリガーから有機体系ミサイルを放ち、ゲータモンは螺旋状の高圧水流を放った。

「クツ、ちっ……」

ケンタルモンは何かかわしながら、間合いを詰めようとするが、敵しそうだ。

「オラオラ、どうや」

「真治、そっぴや充達は？」

「あ、ホンマや。……あ、いたで。」

「確かにあった。敵の真ん前に……って、ええ！ 攻撃、ストップ！」

ゲータモンの言う通り、充を背に乗せたりガルモンはケンタルモンの目の前に現れた。

『自ら死にに來たのか』

焦っていたケンタルモンは深く考えず右手の銃を構えた。

『くたばれ、ハンティング……』

「狙い通り、強化弾、ディグモン」

「ビッグクラック」

ケンタルモンが右手の銃で撃とうとしたその瞬間、足場の地面が急に隆起し、それによりケンタルモンはバランスを崩し、放たれたエネルギー弾は的を大きく外し、上空へ飛んでいった。

『クソッ……、なっ！』

再び平らな地面に着地したケンタルモンは驚愕した。

『ロックオン。撃てるもんなら撃ってみろ』

ケンタルモンの右手の銃にリガルモンの尻尾のマシガンが刺さっていたからだ。

「……おかしいと思ったんだよね。ゲータモンと技をぶつけ合った後に攻撃してきたとき、なんで零距离からハンティングギャノンを撃たずに蹴飛ばしたんだろうつてね。本当は撃たなかったんじゃないかって撃てなかったんだよね。……あの技は威力が高い代わりに一度撃つたら次撃つまでに時間がかかるんだろうつ？」

『クッ……』

『図星のようだな。テイルランチャー』

『グアアア』

零距离でマシンガンの連射を食らったケンタルモンの右手の銃は大破して、しばらくは使い物にならなくなった。

『貴様ら、コケにしゃがんで！』

怒り狂ったケンタルモンは上空に飛び上がった。上空から一気に踏み潰そうとしているようだった。が……

「な、何だ？」

突然、ケンタルモンの周囲が暗くなった。何かと上を見上げると、そこには空を舞う鰐ワニの姿があった。

「知ってるか？ 鰐ワニって意外とジャンプ力あるねんで」

「クツ、クソ……」

「いくで。強化弾、レッパモン」

『くわくわくおろろろ 駆駆裂空斬』

ゲータモンは空中で何度か前転し、サマーソルトの要領で、尻尾を振り下ろした。

『グアアアア』

尻尾はケンタルモンに直撃し、叩き落とした。

「はい、お疲れさん。浄化弾」

最後に真治は清らかな光を放つ弾を撃ち込んだ。

『グアツ……』

『ガトリンググアーム』

「……技能弾、フレイドラモン」

『ナツクルファイア』

ガルゴモンは両手の銃器を連射し、トゥルイエモンは拳に纏った

炎を飛ばし、ミノタルモンにぶつけた。

『……………あ、何かしたか？』

が、その分厚い皮膚のせいか、たいしてダメージを与えられなかった。

「ならば近距離で一気に攻めるぞ」

「……………そうね」

『オツケー、ダムダムアッパー』

『巖兎烈斗』

ガルゴモンはミノタルモンの懐に潜り込みガトリングアームで突き上げ、トウルイエモンは高く跳躍して上空から連撃を食らわせた。

『うん？ ダークサイドクエイク』

『うわああ〜』

『くっ、くそっ』

しかし、あまり動じなかったミノタルモンが左手のデモンアームを地面に叩きつけて起こした地震によって逆に吹き飛ばされてしまっ

た。

『俺達だっっていくぞ。』

「……………（強化弾、メガドラモン）」

「……………（ジェノサイドアタック）」

一也と三葉はD・トリガーから同時に無数の有機体系ミサイルを撃ち出した。

『うん？ おわああ！ ダークサイドクエイク』

ミノタルモンは少し慌てながらも、再び左手のデモンアームで地震を起こし、対抗した。

「またかよ……どんだけ、力押し？」

「……でも、今のは効いたはず」

みんなが大ダメージを与えられたことに期待していたが……

「今のは結構きつかったぞ。俺じゃなきゃどうなっていたか……」

残念ながら致命傷を与えるまではいかなかった。

「そんな〜」

「予想以上の防御力ですね」

デジモン二体が驚く中、人間二人は思いの外落ち着いていた。

「……まだ手はある」

「そうだな。よし、ガルゴモン、いくぞ」

「オツケ〜」

「そうだ。ちょっと試してみるか。強化……いや、技能弾、モスモン」

「モルフォンガトリング」

ガルゴモンは両手の銃器から弾丸を秒間100発の速度でミノタルモンの腹部に撃ち込んだ。

「ガッ、このっ、ダークサイドクエイク」

弾丸の速度が速く反応が遅れたが、ミノタルモンはデモンズアームを叩きつけ地震を起こし、その衝撃で弾丸を退けた。

「ふう……どうだ」

「ガルゴモン、あいつの左手を抑えろ」

「分かった〜」

「何っ！」

安心したのも束の間、ミノタルモンの左手にガルゴモンがしがみついていたのだ。

『このっ、離せ!』

『嫌だよ、使わせないよ』

『この……』

『お喋りはそこまでです』

『なっ……』

声はミノタルモンすぐ近くから聞こえてきた。　　ミノタルモン

の懐に入ったトウルイエモンから。

『どうする気か知らないが忘れたのか。俺のボディーの防御力を』

『……確かに凄いです、それでも一点集中で高威力の攻撃を当て

ればどうでしょうか?』

『まさか……』

「技能弾、アシユラモン」

『阿修羅神拳』

トウルイエモンはミノタルモンの腹部に怒涛のパンチラッシュを浴びせた。

『アタタタタタ……』

某世紀末漫画の主人公の真似をしながら……

『オアタア!』

『グッ……』

『お前はもう死ん……』

「……浄化弾」

『グアッ……』

トウルイエモンが最後の決め台詞を言い切る前に三葉が清らかな光を放つ弾をミノタルモンに撃ち込んだ。

『ちよっ、三葉……』

「……トウルイエモン、何してんの? 似合わないし、パートナーとして恥ずかしいし」

『うっ……』

戦いを終えた巧達はユニモン達と別れ、再び歩き始めた。

その様子がとある場所の、深い闇の中にある結晶に写る。

『ほう、戻って来たのか。多少、人数が増えているようだな。』

……面白い、奴らには地獄を見せてやる』

結晶の中に潜む影がほくそ笑む。

『……ん、何だ？ 奴とそのパートナーは何か……そうか、そういうことか。……面白い、利用しない手は無いな』

不気味な笑みをより深めた影が見つめる先には真治とガビモンがいた……

## 第九話「奴との再会」(後書き)

パートナーデジモンとデータの相性によっては、強化弾として使っていたデータも技能弾として使えるという設定です。

自分でもご都合主義過ぎる気が……

第十話「真治の謎」(前書き)

やっと、タイトルの「メモリーズ」の部分に触れる……

## 第十話「真治の謎」

海。それは、母なるもの。人間の遠い遠い先祖にあたる生物が生息していたとも考えられている。そのせいか、海に来てテンシヨンが上がる人間は多数だ。

巧達もその多数に分類される類だった。（デジモン達にも何となく惹かれるものがあつた）

「……………」

しかし、彼らのテンシヨンは高飛び込みの落下速度を遙かに超える速さで急降下していた。

「あははははつ、ガビモンの言う通りだったね。あれ、みんな言葉も出ないみたいだね」

充を除いて。

「……………はあ、前よりもひどなってるやん。」

充が爆笑し、ガビモンが溜息をつき、その他が口を開けた状態で静止して見つめる先には、大量の墨汁とイカスミを投下したかのようになつた黒に染まつた海（？）があつた。

「何だ……………コレ？」

「何をどうすりゃ海がこんな真つ黒になるんだ？」

比較的早く立直つたりオモンと巧が呟いた。

「……………実は、何年前かに、海上に基地のような、工場のような建物が急に建つたらしいんや。それから、次第に海の水が濁つていったらしいんや」

ガビモンが、以前充に話した通りに巧達に話した。

「いや、濁つたとかいうレベルちゃうやろ。真つ黒やん」

「……………真治、驚くのも分かんぞ。でも、お前も俺が話した分のことはずつと一緒に行動してたから知ってる筈やろ」

「知ってたかもしれへんけど、俺が覚えてる訳無いやろ！ これ常識やろ」

『……ああ、せやな』

威張ることでは無いやろ、と思ったガビモンだったが、なんかもんどくさかったので敢えてツッコまなかった。

『はあ……』

ガビモンがまた溜息をつくのとほぼ同時に溜息をついた巧はこう切り出した。

「なあ充、お前知ってたろ。このこと」

「まあね。でも、よく分かったね」

「どれだけの付き合いだと思ってる」

「ん、十年以上の付き合い」

「うん、まあそうだな。……で、なんで俺達に言わなかったんだ」

「簡単に言つと……面白かったから」

「そうか、面白かったからか。成る程、よく分かった。……うん。こいつ殴つて……ぐはあっ」

怒りを内に秘めた巧の気色の悪い笑顔は、突然飛んできて巧の左頬を捉えた右ストレートにより醜く歪んだ。

「……一回死ぬ？」

無論、三葉の右ストレートだ。（充を変な輩から守るために鍛えたというその拳はときには骨を砕くとも）

「痛つてえな、三葉。良いのかよ、お前の愛する充先輩様に一杯食わされたんだぜ」

何度も不幸を乗り越えたからか、重症には至らなかった巧が三葉に尋ねた。

「……多分、充先輩は、『あまり浮かれ過ぎるな』という思いを込めてわざとそうしたと思う。自らを悪魔に変えてまで正しく導こうとした充先輩……ステキ」

「あ、あ……」

巧は思った。もし、「金城充教」とか出来たらこいつ確実に入るな、……いや、もう既に信者か、と。

「はあく、チャンスだったのにな」

「一也、チャンスって何が」

「葉月先輩の水着姿を見るチャンスに決まってるだろ！ 一応、水着持ってきたのに。……葉月先輩の分も」

「……ああ、そう。……それは残念だったね」

あのユルユイ感じのテリアモンですら一瞬喋り方が変わるくらいの発言を一也がした頃。

「ん……何か、来る予感がする」

「何かって、何ー？ もしかして敵ー」

巧はその危機察知能力で何かの襲来を感じ取った。（幸い、葉月含めてテリアモン以外は一也の変態発言を聞いていなかった。

良かったね、一也、本当に）

次第に真つ黒な海がさざ波を立て始め、それと同時にD・トリガーが敵の襲来を知らせるかのように鳴りだした。（音量については小さめに設定出来たようだ）

「……来る！」

さざ波が止まると同時に真つ黒な海から現れたのは、青い体に白色の手足を持ち、さらに背中からも白色の触手を生やした悪魔だった。

『よつこそ、漆黒の海へ』

「マリンデビモン、完全体……」

正常な思考を取り戻した一也が、海に潜む悪魔の情報を読み上げた。

「アシユラモンと同じ完全体かー」

「でも、全員でかかれはいける！ いくぞー！」

「……進化弾……」

『リオモン進化』

『ヴルムモン』

『ガルモン進化』

『リガルモン』

『ピクシモン進化』

『エルフモン』

『テリアモン進化』

『ガルゴモン』

『ロップモン進化』

『ガビモン進化』

『ゲータモン』

巧達はそれぞれのパートナーを進化させ、マリンデビモンに相対した。

『ほう……では、こちらも援軍を呼ぼうかな』

そう言って、マリンデビモンは二本の触手を水面に叩きつけた。すると……

『うそでしょ……』

『おいおい、マジかよ……』

マリンデビモンの背後から、デジモン達が三十体程現れた。無論、

全て悪霧に操られている。

「ゲソモン、エビドラモン、シエルモン各十体くらいだね。成熟期といえど、この数はきついし、何より完全体のマリンデビモンもいるんじゃ、分が悪過ぎるね」

『言っておくが、逃がすつもりは毛頭ないからな』

マリンデビモンがもう一度触手で水面を叩くと、地響きが鳴り、巧達の背後の地面が盛り上がり壁のようにそびえ立った。

『空から逃げようとしても無理だ。』

ギルティブラック

シヤハアアア』

『グ、ガアアア』

マリンデビモンが上空に墨を数回吹き上げると、その墨が直撃した何かが叫びだした。

「エアドラモン、成熟期。……あの様子はまるで、悪霧に操られているみたいや」

『確かギルティブラックは猛毒の墨を吹き付ける技って聞いたったのに。何でや……』

『さあ、何でだろうね。……いやいや、そんなに警戒しなくても。』

別に君達と戦おうって訳じゃない。……真治、ゲータモン、君達に面白い話をしてあげようと思ってね』

「俺達に話やと。というかなんで俺の名前知ってるんや……?」

『……真治、聞く必要は無いで。マリンデビモン、さっさとどいてもらおうで！』

スプラッシュファンゲ』

ゲータモンがマリンデビモンに向かって駆け出し、その大きな顎でマリンデビモンの左側の触手に噛み付いた。

『……痛いね。話をしてあげようと言ってるだけじゃないかっ!』  
『ガハッ……』

しかし、マリンデビモンはゲータモンが噛み付いたままの触手を振り上げ、砂浜に叩きつけた。

「ゲータモン! くそっ、ヴルムモン、みんな、いくぞ!」

『……君達にも聞かせてあげようと思ったが、聞く気が無いのならまあ良いか。真治さえ聞いていれば良いことだし。……やれ』

マリンデビモンが合図すると同時に、デジモン達が襲い掛かってきた。

『くそっ……やるしかない!』

『 クリムゾンバースト。……くそ、キリがない』

『 ガアアア』

『 ちっ……』

「こんの、後ろを取ったつもりか。強化弾、ライズグレイモン」

「トライデントリボルバー」

『 グツ、ガバアアア』

「これじゃ浄化する暇も無えじゃねえかよ」

巧とヴルムモンは上空で、エアドラモンの群れと戦っていた。が、予想よりもエアドラモンの数が多く、厳しい戦いを余儀なくされていた。

充やリガルモン達も、ゲソモン達と戦っていたが明らかに疲労していた。

『ダムダムアツパー』

疲労感を押し殺し、ガルゴモンはガトリンググアームでゲソモンを殴りつけた。

『ゲシャアアア』

『も〜、どんだけいるんだよ〜』

「俺に聞かれても知らねえよ。強化弾、メガログラウモン」

「アトミックブラスター」

一也もD・トリガーから光線を発射し、シエルモンを撃ち抜いた。

『シエギアアア』

「シードラモンのときは魚のことを考慮して使わなかった手段だ。強化弾、ライドラモン」

『ブルーサンダー』

充はD・トリガーから青色の雷を海に向かって撃ち出した。

『『『エビヤゲシャアアア』』』

雷は海を駆け巡り、海にいたデジモン達に広範囲にダメージを与えた。

「今のうちに畳み掛けよう」

『いや、充待て。まだ来るみたいだ』

リガルモンがそういうと同時に水面から、また同じくらいの数のゲソモンやエビドラモンが現れた。

「困ったな。……そうだ。悪核を破壊すれば……。でも、一体どこにあるんだ……」

『ガハッ。……何かしたようだな。まあ良い。この海のデジモンは全て闇に染まってるからな』

マリンドビモンも雷のダメージを受けていたようだ。

「……で、話って何や？」

『真治！』

『聞く気になったか。よろしい、お話ししよう』

ゲータモンの静止を聞かずに、何を思ったのか真治はマリンドビモンの話を聞き始めた。

『この海にある海上基地は、ここら一带に悪核をばらまく拠点になっている。もちろん、基地内にも基地を支配しておくための悪核がある。……ちなみにこの海自体を支配しているのはそれとは別の悪核だ。ここで、問題。』

現在の悪核はどうして生まれたのでしょうか？』

「は……？　んなこと知ってる訳無いやろ」

『そつや、答える必要は無い』

マリンドビモンが囁くように言うと、真治は首を傾げたが、

『じゃあ、問題を変えよう。十年前、君に何があった？』

『あいつー！』

「十年前……っ！　じゅ……ね……まえだと……」

マリンドビモンが問題を変えると様子が明らかに変わった。

『真治、問題に答えんな！　考えんな！』

「ゲ……モン、し……き、俺は……」

マリンドビモンはすかさず、続ける。

『何で、君は巧達に会ったとき頭痛に襲われた？　何で、彼らの名前を一度忘れた？　十年前、最後の戦いで……』

『ハイドロストリーム！』

『グガッ、ウギヤアア……』

ゲータモンは触手で地面に抑えつけられた体を捻り、話を遮るかのようにマリンデビモンの脳天に、高圧水流をぶつけ吹き飛ばした。

『き、貴様あ……………』

『ええ加減にせえよ。だらだら喋り過ぎや』

「俺は……………」

そのとき、真治がフラリと立ち上がり、

「強化弾、ディアボロモン」

「カタストロフイーカノン」

虚ろな目でD・トリガーを構え、破壊エネルギー弾を撃ち出した。

『究極体の技だと……………グギャアアア！』

赤色の破壊エネルギー弾はマリンデビモンの頭部を貫通し、水平線の彼方へ消えた。

「……………誰や？」

何故か究極体の技を発動させた真治はダランと手を下ろし、力無く倒れた。

『真治、おい真治！』

ゲータモンはガビモンに退化し、真治のもとに駆け寄る。

そのとき、空から何者かが降りてきて、真治の様子を確認する。

「大丈夫、気を失ってるだけだ」

『エアドラモンの群れは全員、気絶させた。海よりかは少なかったからな』

『巧、ウルムモン……………』

巧とウルムモンだった。

『……………ん、巧。あいつの頭……………』

「ああ、間違いない。悪核だ」

ゴーグルを掛けた巧の目に映ったのは、マリンデビモンの頭部に開いた穴から覗く悪核だった。

『……………ガハッ、グハッ、貴様ら……………』

「これで終わらせてやる、浄化弾」

巧はD・トリガーをマリンデビモンに向け、清らかな光を放つ弾を撃ち込んだ。

『ガハツ、ゲウ……』

浄化の力を秘めた弾丸を受けたマリンデビモンは白く光り、その光から上空に向かって光の束が上がり、細かい光の粒となって降り注いだ。

『は〜は〜、あとどれだけ〜？』

『大分減ったと思いますが……。あ、上を見てください！』

トウルイエモンに言われ、みんなが上を見上げると、空から光の粒が降っていた。

「巧か真治がここの悪核を破壊したんだね」

「やっと終わったー」

力を使い果たした四人と四匹は砂浜にへたりこんだ。

『 助かったゲソ』

「語尾そのまんまだあぁ！ …… っていうか○○娘!?」

白い光の中から現れたのはマリンデビモンではなくゲソモンだった。（頭の穴は光に包まれている間に修復されたようだ）

『まさか、デジモンの中に悪核が入っていたとはな。 …… 直接入れられると暗黒進化するのか』

「リオモン暗黒進化って何だ？」

『闇の力で凶悪に進化すること』

「ふーん。リオモン何でそんなこと知ってるんだ？」

『そりゃ……何でだ？』

「いや、俺が聞いてんだけど……」

『おい、オイラ達も戻って来たぞ』

巧とリオモンが話してる間に充やガルモン達も戻って来た。

「よく悪核の場所が分かったね」

「ああ、マリンデビモンの中に入った。」

『デジモンの中に入っていたなんて信じられないわ……。そういや、

真治とガビモンは？ あとマリンデビモンは？』

『マリンデビモンならここにいるぞ。今はゲソモンだけど』

『皆さん、すいませんでゲソ』

「そうか。ゲソモンが進化したのか」

「真治は突然倒れて、ガビモンが今様子をみてる」

『大丈夫なんですか？』

「ああ、気絶してただけみたいだし」

「う、うーん」

『真治！』

巧が言い終わると同時に、真治が軽く呻き声を上げた。

「痛て、俺は一体……」

『真治、大丈夫か！』

「ガビモン……、ああ、大丈夫や。何か迷惑かけたみたいやな」

『真治、ほんまに良かった』

「あの海上基地が悪核をばらまいてる拠点なんだね」

『そうでゲソ。操られてたときにその情報が入られていたゲソ』

「俺もマリンデビモンからそう聞いとった。」

コバルトブルーの海を取り戻したコーストビーチで巧達はゲソモ

ン（元マリンデビモン）からも情報を聞き、今後の方針を決めていた。

『 ちょっと良いか？ 巧、リオモン 』

「何だ、ガビモン」

『 別に良いけど…… 』

そんなときだった。ガビモンが巧とリオモンを呼び出したのは。

『 巧、リオモン。俺はいつつも同じ夢を見るんや 』

「夢？」

『 ああ、夢や 』

『 ……どんな夢だ？ 』

ガビモンが語るその夢の内容は巧とリオモンを硬直させた。

『 どこかも分からない空間で、真治を十年くらい若返らせた感じの少年が何者かに黒い塊を体内に埋め込まれる。っていう夢や 』

「おい、その黒い塊って……」

『 ああ、悪核にそっくりやった 』

『 嘘だろ……いやいや、たかが夢だろ？ 』

「そう……だよな」

巧とリオモンはたかが夢だろうと考えるが……

『 …… デジモンは死んだら長い年月をかけてデジタマからまた生まれ変わるんや。そして、稀に前世の記憶を持って生まれてくる奴もおる。……この夢も、前世の記憶の断片やと考えられへんか？ 』

ガビモンの考えも否定できなかった。

「 ……だとすると、真治は十年前にデジタルワールドに来たことになるけど……。ああもつ、頭が痛くなる」

『 ……なあ、何で俺達にこのこと話したんだ？ 』

『 ……初めて会ったとき真治が言ってたやろ。「元に戻す方法知っ

てんのに何しとんねん。 本当にパートナーを救いたかったら、多少荒療治しても救おうとするんちゃうんか？」って『

「……ああ、言ってた」

『そのときは操られてたけど、憶えてる』

そして、ガビモンは驚愕の一言を口にする。

『元に戻す方法を知らなくてもええ。もし、真治や俺が暴走したら、どんな手を使っても止めてくれ！……最悪、戻らんかったら殺してもでも止めてくれ！』

「殺すって、そんな……」

『……あくまで最悪の場合やけど』

『マジでかよ……』

## 第十話「真治の謎」(後書き)

pixivに投稿されている「デジモンインフィニティー」という二次作品。

それについて調べてたら、リオモン、ガルモンという名前のデジモンをpixiv内で発見。(あとガビモンの完全体にしようと思っていた名前も)

どっしょしょ……

## 第十一話「基地への侵入」(前書き)

先に言っておきます。

戦闘シーンほぼ無いです。ていうか皆無です。

## 第十一話「基地への侵入」

巧達は、ゲソモンからの情報を基に、海上基地に繋がる鉄橋に向かってコーストビーチから数百メートルの位置を歩いていた。

そんな中で、リオモンと巧の表情は沈んでいる。

（あそこまで切羽詰まったガビモンは初めて見た。最悪殺せつて……）

（完全に信じられるような内容では無いけど、何かな……。もし、本当に真治の中に悪核があつてそれで真治が暴走したら……）

「巧、どうかしたんか？」

「ふえ？ ああ、何でも無い」

唐突に真治に声を掛けられ、巧は思わず変な声を出してしまった。

「本当かいな？ ……まあ、ええけど。それより、下見てみ」

「ん、下つて……あ」

あれこれ思案している間に鉄橋まで着いていたようで、もうみんなは鉄橋の上を歩いていた。

ただ、巧だけは鉄橋の上に居ず、真治の真横の海面から頭だけ出していた。

「ははは……もうちょい早く言ってくれよ」

「いやでも、そこまで浸かってたら普通気づくやろ」

「まあ、普通はそうだけど。……ああ、マジで寒い……」

「寒い。やっぱり寒い」

「巧がわざわざ海に入っていくからでしょ……。……入る前に私は何回も言ったのに」

「悪い、全然気付かなかった」

「ずーっと上の空だったからねー」

「まあな……」

若干一名寒さに震えながら、巧達は鉄橋を渡る。

そして、目の前に現れたのは、工業地帯から一つ搔っ攫って海に  
乗せたかのような海上基地だった。

「ところで充、あの二人は何してるんだ？」

巧が指差す先には、何処かから取り出したノートパソコンで何  
かをしている一也と三葉がいた。

「ああ、二人には基地の中のコンピュータをちょっとクラッキング  
してもらってるんだよ」

「クラッキングって……てかあいつら出来たんだ」

「父親がIT企業の社長だからね。色々と教えてもらってたみたい  
だよ。……何故か苦い顔して話してたけど」

犯罪行為を横目で見ながら、巧は充にこの冒険の始まりに関わる  
一言を口にする。

「じゃあ生徒会活動の資料探しとやらも、あれ使ってあいつらに任  
せれば良かったんじゃない？」

「それは……あ！」

「おい！」

天才でもミスはするものだった。

「ったく……お前がそんなミスしなけりゃ、こんな訳の分からない  
世界に来ること無かったかもしれないのに。……てか俺達元の世界  
に帰れんのか？」

それは意図的に避けていた話題。敢えて考えないようにして  
きたから、ここまで来れた部分もあった。

故に、巧がその話題に触れたのをきっかけに、雰囲気次第に重  
苦しいものになっていく。

「何だみんな、急に黙っ……痛っ！」

恐らく三葉が飛ばしたであろうナイフにもいつも以上に殺意が込  
められていた。

「何すん「黙れ!!」だ……。あつ！ その……みんな、ごめん」  
三葉に間髪入れずに怒鳴られ、巧はやつと自分の不用意過ぎた発言に気づいた。

「こつちに来てから結構経ったしねー。……みんな心配してるだろ  
うなー」

「そうだね。もう異変に気づいてる家族もいるだろうし」

「もう私達帰れないのかなー？」

その問いに答えられる者はこの場には存在せず、再び沈黙してしまふ。

その沈黙を破ったのは真治だった。

「あ、そついやパソコンの電源付けたままやったな。あゝあ、電気代の無駄やゝ」

真治の突然の発言に全員がしばらく固まっていたが……

「何言つてんだ！ お前は葉月先輩の質問に「フフツ、いきなり何言つかと思つたら、面白いねー」……なつ、葉月先輩があいつのことを面白いつて……ガクツ」

『一也、無問題（モーマンタ〜イ）』

「葉月、笑い事ちゃうぞ。はよ帰らんと電気代が。いや、それ以前につけばなんオカんにバレたら何されるか……」

『でも、残念だけどオイラ達帰り方知らないよ』

「んなこと分かるとるわ。でも、はよ帰らんとオカんが」

『そんなに怖いのか？ あんたのオカん』

「嘗めたらアカンで。親戚からは、『見た目は鬼神、頭脳は鬼神』と呼ばれてるくらいやからな」

「……それ、ただの鬼神。……いや、鬼婆」

『見た目、天女とかじゃないんですね。……ていうか嫌です、そんなコロン』

一気に緊張が解れたのか、いつも(?)の雰囲気に戻っていった。

……ロップモンがコロンを知っていた訳は、後々(ちょっと強引な)理由が明らかになる……かも。

そんな仲間の様子を少し離れて見ながら、巧は呟いた。

「真治って……なんか凄いな。俺が重苦しくした空気を一気に変えて……」

『そういう奴なんだろうよ、真治は』

隣にいたリオモンがそう言つと、巧は声のトーンを少し下げた言う。

「でも……真治の中には悪核がある可能性がある。それが暴走する可能性も」

『……否定はしないけど。でも、真治は真治だろう？』

「ああ……」

リオモンの問いに曖昧に答えた巧の表情はどこか沈んでいた。

トン、トン

「ん？ どうした、三葉？」

突然、三葉に肩を叩かれた充は、

「……終わりました」

作戦の準備が整ったことを知る。

「あ、終わったんだ。ありがとう（ニコッ）」

その言葉を聞いた瞬間、三葉の顔が雲雀に会ったときのイーピンよろしく、一気に紅く染まり、

「……そ、そそそそ。とととと……こことと……ポ  
ンッ」

爆発した。（いや、精神的な意味で）

ちなみに、三葉と共にクラッキングしていた一也はというと……

「へー、凄いねー。一也君、やったねー」

「そ、そそそそ。たたたいし……ことととじゃな……ボンッ……  
ブハアッ」

（精神的に）爆発し、さらに鼻孔から赤いレーザーを発射した。

「ちよっ、えー！ 一也君、大丈夫ー？」

「は、はい。大丈夫……ブハアッ」

「ここから入るよ」

クラッキングにより入手した海上基地の見取り図を使い、巧達は海上基地の裏口に回った。

「充先輩に頼まれてやったのは主に海上基地内の見取り図の入手」

「……と、基地内の監視カメラやセンサーの無効化です」

一也と三葉がした結構凄いことを踏まえ、充は作戦を話す。

「他にも、この裏口の鍵を解除したり、偽の指令を出してこの辺りに警備の目が行かないようにしてもらったよ。という訳で、まずこの裏口から入る。この基地は地上二階と地下一階があるから、そこから三組に別れて、各階で悪核の搜索をする。以上。……あ、あと絶対敵に見つからないでね。せつかくセンサーとか無効化したんだから」

そう締めた充がジト目で見つめる先には、

「な、何だよ」

疫病神こと巧がいた。

「だってねえ、巧の不運が変な風に働いてしまいそうな気が……」

「いや大丈夫だって。そんなこと……あつたらすいません」

……早速、作戦に綻びが出始めたかもしれない。

しかし、巧の不運に関してはこれ以上言っても仕方ないので、とりあえず組分けをすることにした。

その組分けでいち早く動いたのは一也でも三葉でもなかった。

「俺とリオモンは真治、ガビモンと組む（真治を俺の目が届く範囲に置いとかないと）」

「巧……」

それは巧だった。事情を知っていたリオモンとガビモンだけはそ

の真意を理解していたが、その他は驚きと困惑の混じった視線をぶつけた。

「な、何だよ」

「いや、まさかお前が一番に俺を選ぶ思わなかったからな。もしかして、俺のこと好きなん？」

「……キモッ」

「違いよ。こつちにも色々あんだよ。……あと三葉はその汚物を見るかのような目は止めてくれ。泣きそうになる」

何はともあれ、(巧、リオモン、真治、ガビモン)で一組決まったことで他二組もあっさり、(充、ガルモン、三葉、ロップモン)、(葉月、ピクシモン、一也、テリアモン)という、まあある程度予測出来た二組に決まった。

「じゃあ、作戦開始だ」

基地の中は、様々な装置が各所に置かれ通路の幅は狭かったが、横道も多く奥行きもあったため、外から見たイメージよりは広く感じた。

「じゃあ行くこうか。僕達は二階に行くから、葉月達はこの階を、巧達は地下を頼む」

「分かった。行くぞ。……って、何してんだ、リオモン？」

先陣を切ろうとした巧は壁に向かってなにかそわそわしているリオモンを見て、足を止め近寄って少し屈んだ。

「なあ、巧。このスイッチかなり気になるんだけど」

触れるか触れないかの位置で震えるリオモンの指の先には、「警報」と印字された赤いスイッチが。

「リオモン。……ここは止めておこう。せっかくの準備が台無しになるから。押した瞬間、敵来るから」

『分かった。巧、我慢する』

「そうだ。じゃあ、行くか」

自ら居場所を晒そうとしたリオモンを止めた巧が立ち上がる瞬間、上から片手に収まる大きさの金属製の立方体の箱が落下してきた。

その箱は一直線に巧に向かって行き、

「うし……ん、あだっ、いだっ、うだっ、えだっ、おだっ、いつ、たっ、痛ったああ！ くっ、痛って〜」

見事に八つの角全てが後頭部に直撃し、巧は痛みのみならずバタバタと転げ回った。

「ただなら良かったのだが……」

「痛って〜〜！」

ブンツ、バシツ、カチツ

「痛った〜。……ん」

ジリリリリリリリ〜

「あ、あれ……」

誤って押してしまったスイッチによって鳴り響くサイレンで基地内が騒がしくなり、デジモン達の往来が激しくなった。そして……

『……ア、見カケナイヤツラ。モシカシテ侵入者カ？ ナラ大変ダ。侵入者ハツケン、侵入者ハツケン……』

茶色の機械デジモンに見つかった。

「ガードロモン、成熟期。……って、あれ〜。もしかして見つかったちゃった？ やっちゃったね、テヘツ」

「……お前は何してんだああああ！』』』』」

「……はあはあはあ……」  
『『マデー』』』

巧が自ら鳴らした警報のせいで、基地内に侵入していたことがバレてしまい、巧達はガードロモンの大群に追われ、正に逃走中だった。

「くそっ、こうなったら俺が引き付けるから……」

自らが招いた責任を取ろうと、巧は腰のホルダーからD・トリガーを取り出しながら後ろに振り向いた。

「このっ、強化……って、うわっ」と

が、足がもつれてこけてしまい、尻餅をついた。さらに尻の下には鋭利な形をした何かの部品の破片らしきものが散らばっており……  
「いつ、ぎゃああああ！」

案の定、全てが尻に刺さった巧は痛さの余りロケット花火並のスピードで跳び上がり、

「あだっ、痛っ」

天井で頭をぶつけ、さらに頭から床に落下した。

「痛てて……」

カチッ

「うん？」

尻と頭の痛みを耐えながら、巧は近くにあった壁に手をついて立ち上がった。

「だけな訳は無く、壁に手をついたときにまたしても何かのスイッチを押してしまったようだ。」

『巧、お前また何かのスイッチ押したのか？』

「う、うるせえ。自ら押そうとした奴に言われたくねえよ」

巧とリオモンが言い合っていると、周囲から何らかのシステムが発動しているかのような機械音が聞こえてきた。

『キサマラ、トラップが発動させタナ』

巧の不幸での突拍子も無い動きを初めて見たからかフリーズしていたかのように停止していたガードロモン達で比較的早く立ち直った一体が言ったワードは非常に嫌な予感のするものだった。

「え？　トラップって……」

巧がそう言った瞬間、天井がウィイインと音を立てて開いた。

「……は？」

カチツ、バシユツ、バシユツ、バシユツ

『ウワー』

床の下に仕込まれていたらしき巨大なバネが一気に伸び、所々の床が数メートル程跳ね上がってガードロモン達の三分の一が上の階まで跳んでいった。

『す、凄えぞ巧。考えてやったのか？』

「あ、ああ俺の計算の内だけ。どうだ、凄えだろ（はははは……はあ？）」

「……何コレ？」

『ありなんですか、こんなの？』

「一瞬だったね」

『オイラ、何が起こったのかまだ分からないよ』

偶然とはいえ、一気に敵を三分の一が減ったことに、みんな驚いていた。

但し、トラップはこちらばかりに上手く働くとは限らない。

「巧の不運のお陰なのかなー？　……って、え？　まさか……きや

ー」

『ちよっ、はづっ……きやああ』

「巧、おまつ……何してんだあああ」

『うわ、やつぱり僕も』

葉月、ピクシモン、一也、テリアモンの「一階探索組」が跳ね上

がる床の餌食となり、二階まで跳んでいった。

「あ……」

そして、またウィインと音を立てて天井は閉まった。

「……本当に何してんの？」

「すみません」

『まだ何か音聞こえるよ』

ガルモンの言う通り、天井が閉まった後もまた何処からか機械音が聞こえてきた。

『マダトラップハアル』

ガードロモンの内の一体がそういうと同時に、

『『エ……』』

急に所々の床に穴が空き、

『『ウワアア』』

残りのガードロモンの内の半分が飲み込まれた。

「またかなり減ったけど何か素直に喜べへんな」

『俺も何か嫌な予感がすんねんけど……』

嫌な予感というものは当たるもので、

パカツ、パカツ、パカツ、パカツ

「やっぱり、こうなんのかいなあああ」

『予想しとったけどなあああ』

『これからスイッチを押したくなっても絶対我慢しまあああす』

「色々すみませんでしたあああ」

真治、ガビモン、リオモン、巧の「地下探索組」の面々が急に開いた穴に落下していった。そして、静かに一階の床は元通りに戻っていた。

「さてと、僕達は逃げようか」

「……そうですね」

『オイラ進化しようか？』

『狭いでしょ』

充達はトラップが作動する前のように逃げ出した。

海上基地に侵入した巧達の運命や如何に。

第十一話「基地への侵入」(後書き)

感想、批評、その他諸々待ってます。

## 第十二話「紅蓮の機竜」(前書き)

8月終わるまでには投稿できました

あと、D・トリガーに新たな設定が。……ご都合主義、すいませ  
ん。

長くなりました。

## 第十二話「紅蓮の機竜」

「あだっ」

『いたっ』

「げぼはっ」

『ぐぼえっ』

巧が開いた(？)穴から落下した巧、リオモン、真治、ガビモンは地下室の床に叩きつけられた。ちなみに、比較的生々しい悲鳴を上げたのが、真治とガビモンである。

「痛てて……ここどこだ？」

その地下室は学校の体育館四つ分くらいの大きさで、倉庫として使われていたのか大量のコンテナが等間隔に整理されて置かれていた。巧達が落ちたところに一番近い壁と、そのちょうど反対側にあたる壁には扉があつたが、開きそうにはなかつた。

「なんや無駄に広いな。……って、あそこなんか凄いことなつとるぞ」

真治が指差したところには、三メートル程の高さの茶色の山を作り上げたガードロモン達がいた。

『ピピ……ガガ……行動不能』

どうやら落下の衝撃で故障してしまつたようだ。

『真治、どうするつもりや？』

「せやな。とりあえず浄化弾で悪霧を払つとくか」

「そうだな」

巧と真治はD・トリガーをガードロモン達に向けて構え、

「浄化弾」

清らかな光を放つ弾を撃ち込んでいった。

……はずだつたが、

「えっ」

『なっ』

『嘘やる』

「な、何でや……？」

浄化弾が放たれたのは巧のD・トリガーだけで、真治のD・トリガーは何度引き金を引いても、カシッ、カシッと鳴るだけで、その銃口からは何も放たれなかった。

「ちよい待てや。おかしいやろ。何で俺だけ……？」

「真治、落ち着け。俺がお前の分までやっつくから、な」

「あ、ああ、頼むわ……」

予想外の事態に珍しく狼狽した真治を宥め、巧は再びD・トリガーを構えた。

（まさか、真治の中の悪核が関わっているのか？ ……いや、今考えることじゃないな）

脳裏に浮かんだ疑問を振り払い、巧は引き金を引く。

「浄化弾」

「あゝ。何か疲れた」

ガードロモンをあらかた浄化した巧は床にへたりこんだ。

「浄化弾は俺らの感情に呼応する部分も多少あるしな。……しゃあないとはいえ、すまんかったな」

「べつに気にすんなって」

「おおきに」

少しして、真治は徐にD・トリガーを取り出し、いじくり始めた。『真治、どないしたんや？』

「いやな、さつき何で浄化弾が撃てへんかったんやろな、って思て別に俺が疲れてたわけでもあらへんから、こつちが原因かと思たんやけど……特に問題は無いみたいやねん」

（やっぱりこれも悪核が関係してるのか？ ……真治に手間を掛け

させない方が良かった。俺がもつと頑張らないと）  
首を傾げて手元を見つめる真治を、巧は複雑な気持ちで見つめていた。

巧が精神力を回復したため、二人と二匹は 倉庫で悪核の探索を始める。巧はゴーグルを、真治はサングラスを掛けて悪核が中に潜んでいるかコンテナ一つを確認していった。

侵入が明らかになつたからここにも追っ手が来る筈なのだが、一切そつというものは現れない。

不審に思いつつも、探索を進めていた巧達だつたが……

『巧、何だあれ？』

リオモンの指差す先にはレーザーのような緑色のいくつかの光。

『リオモン、いちいち気にすんな。……ここもハズレか』

『でも、こつちに来てるぞ』

リオモンの言う通り、光は狙っているかのように巧とリオモンに向かつて加速しながら飛んで来る。

『避けるんや！！ それはただの光やない』

『えっ……おわっ！！』

『くっ……』

真後ろから真治に呼びかけられ、咄嗟に巧とリオモンは横に跳んで避ける。

『痛っ……くそ』

が、リオモンは完全に避け切れず右腕に当たつたようだ。

『大丈夫か、リオモン』

『ああ、掠つただけだ』

『まだや！』

『んなっ』

『ちっ……』

ガビモンの声で後ろを振り返ると、Uターンして再びこちらに向かって来る光が。

「何なんだよ、これ」

「追尾式のようやな」

『とりあえず逃げるんや!』

「リオモン」

「ガビモン」

二人はそれぞれのパートナーの名を呼び、D・トリガーを構えて、

「進化弾」

進化の力を秘めた弾丸を放った。

『リオモン進化』

『ヴルムモン』

『ガビモン進化』

『ゲータモン』

『クリムゾンバースト』

ヴルムモンは紅色の炎で光を焼き払おうとするが、

『何だ……このっ』

光は意思を持つかのように炎を避けてヴルムモンの横腹に直撃する。

『がはっ』

「大丈夫か」

『何とかな。でも、本当にただの光って訳じゃなさそうだ。レーザー

ーか?』

『おい、まだ来んで』

ガビモンがそう言うとはほぼ同時に倉庫内の至るところから例の光レーザーが現れる。

「ちっ……どこかにこれを撃ってる奴がいる筈だ。引き付けながら上から見つけるぞ」

『ああ』

巧を乗せたヴルムモンが翼を羽ばたかせ、上昇を始める。

「せやったら、俺らは……」「いいから俺達に任せろ！」「……えっ、ちよい待てや。おい！」

真治の言葉を一方的に遮り、巧は飛んでいった。大多数のレーザーも追いかけていった。

「なんやあいつ、どないしたんやろ……？」

真治は一度上を見上げて首を傾げた。

倉庫の中を飛び回り様々な角度から襲撃して来るレーザーをすんでのところで避けながら、ヴルムモンとその背に乗る巧はレーザーを放っている張本人を探す。

『邪魔だあ。バーニンググライド』

ヴルムモンが炎と高熱を纏った翼で払いのけるが、自在に動く十発以上のレーザーの内の数発しか払えず、また逆にレーザーを浴びてしまう。

『ぐああっ、くっそ〜』

「強化弾、ペガスモン」

「ニードルレイン」

巧はD・トリガーから針の雨を撃ち出した。針の雨は、残りの攻撃を仕掛けようとしていたレーザーを打ち消した。

『ふう……終わったか』

「いや、まだだ」

巧が言うと同時に再び下からレーザーが現れる。

だが、巧はレーザーが現れるのを見て、何か納得したかのように頷いた。

「うん、何となく大体分かった。ウルムモン、あの方向に向かって飛んでくれ」

そう言っただけで巧が指差したのは、巧達が落ちた辺りから遠い方の扉の方向だった。

『え？ ああ、分かった』

ウルムモンは巧の言った通りに扉に向かって飛び始めた。

すると、ちょうど扉まであと十数メートルのところまで追いかけて来ていたレーザーが加速し始め、ウルムモンを囲むように回り込んできた。

「やっぱりこの辺りか」

『もしかしてレーザー撃ってる奴の場所か？』

「ああ、いくら自在に動かしているんな場所から出現させたとしても、出て来る場所に偏りが出てたからな。大体の位置は分かる。急にレーザーの動きも変わったしな」

『そういうことか』

「一気に突っ切るぞ。技能弾、フレイドラモン」

巧がD・トリガーをウルムモンの背中に向けて引き金を引くと、ウルムモン自身が炎に包まれる。

「あ、俺もやばいかも……」

『ファイアロケット』

炎を纏ったヴルムモンは正面に向かって一気に加速し、レーザーをものともせず突き抜けた。

その際に背中からの辺りから断末魔のような叫び声が聞こえなくもなかったが、あまり気にしなかった。

『よし、抜けたぞ。……つて、焦げ臭っ！』

「お前が俺まで炎に包むからだろうが！……この技撰んだの俺だけだ。死ぬかと思ったわ！」

『あ、ごめん。……おい、あいつじゃねえか。レーザー撃ってきた奴』

ヴルムモンの視線の先には、クワガタの顎のような頭をした人型のサイボーグ型デジモンがいた。

「てめえこのやろ……はあ、ああ多分あいつだろうな」

ところどころ焼け焦げた服を纏い、巧はD・トリガーを再びヴルムモンの背中に向ける。

「行くぞ。技能弾、ガルダモン」

そして、その引き金を引いた。

『シャドーウイング』

ヴルムモンが一度翼を羽ばたかせると、その衝撃で超速の真空刃が発生。その真空刃は件のデジモンに向かって飛来する。

『……む、はっ』

その件のデジモンは人型での身軽さを活かして跳躍。すぐ近くのコンテナの上に着地した。

『ちっ、避けたか』

『いや、当たりましたよ』

そう言った件のデジモンの右足には確かに、決して浅いとは言えない切り傷があった。

「メタリフェクワガモン。完全体か」

『ほう、よく見つけましたね。私はこの地下一帯を任されている者』

です』

巧達がメタリフェクワガーモンの前に降り立ったそのとき、D・トリガーがピリリリっとけたたましく鳴り響いた。

「やっぱり悪霧か……」

「その通りですよ。……いやでもまさか侵入者が現れるとは思いませんでしたよ』

そう言っつてメタリフェクワガーモンは、現実世界でのI・O・a・dのようなモニターを取り出した。その画面は八つに分割されて、様々な場所からの倉庫内の様子が写されていた。しかし、いくつかの部分は灰色の砂嵐が発生していた。

「まさかシステムをクラッキングして侵入してくるとは思いませんでしたよ。何とか元の状態に戻しましたが。……誰かが警報を押してくれなければ危ういところでした』

『巧……』

「あはは……そりやどうも」

ヴルムモンに多少軽蔑の籠った目で見つめられた巧は苦笑いするしかなかった。

『見てください。ところどころ写ってませんよ。おそらく貴方方の仲間がカメラ自体を破壊したんでしょうね』

『きつと真治達だな』

「あ、ああ……」

ヴルムモンの発言に対して巧は何か複雑な表情を浮かべた。

『まあカメラを破壊した者は後にして貴方達から排除しますか。ホーミングレーザー』

メタリフェクワガーモンは両手指からあのレーザーを撃ち出した。

「ちっ……」

『やっぱり来たか』

レーザーは様々な角度から巧とヴルムモンを狙う。

「くそっ……」

(俺達だけで何とかしないとイケないのに……)

『このっ、クリムゾンバースト』

ヴルムモンが紅色の炎で焼き払おうとするも、レーザーは自在にかわしつつヴルムモンに突撃する。

『がはぁっ』

「ヴルムモンっ！」

『よそ見している暇はありませんよ』

「くっ……」

巧が振り向くと、そこには自分目掛けて飛来する一筋のレーザーが。

「しまっ……」

巧は思わず目を閉じた。

ドオオン

辺りに爆音が響く。

(どう……なっただ)

巧がその<sup>まぶた</sup>瞼を開けると目の前に、右手に握ったD・トリガーを前方に突き出して立っている、よく見知った少年の背中があった。

「ふいー、何とか間に合ったな。ぎりぎりやったけど」

「し、真治！ お前何で？ あのレーザーは!？」

「あゝ、近くでお前らの話し声が聞こえたさかい、ゲータモンにこのコンテナまで飛ばしてもうたんや。レーザーは……」

『 貴方、一体何をしたんです？』

唐突にメタリフェクワガーモンが口を挟んできた。

「お前は確か……メタリフェクワガーモン言うたな」

『その通りですよ。で、貴方はどうやってあのレーザーを無効化し

て、そのコンテナを破壊したんです?」

メタリフェクワガーモンは右手で真横のコンテナを指差した。そのコンテナは爆発でもしたかのようにえぐれて、中身(空)をさらけ出していた。

「ああ、あれはこのD・トリガーの能力の一つや。画面横の三つのボタンのうち、真ん中のボタンを押すとあくら不思議。画面がある面の反対側の面が敵の攻撃を受け流す盾になるんや」

「俺、そんなの聞いたこと無いんだけど」

「あく、そついやこれのことを充達に話しとるとき、お前らとガビモンはどっか行つとつたな」

「あのときか……」

巧が言うあのときとは、マリンデビモンを倒した後ガビモンが巧とリオモンに真治と自分自身について話していたことである。

「そついうことでしたか。ホーミング……」

「俺を忘れてへんかあ?」

「なっ……」

メタリフェクワガーモンが両手指からレーザーを撃ち出そうとするそのとき、背後から緑の巨体が跳び上がって来た。

「食らえや、スプラッシュファンク」

緑色の巨体、もといゲータモンはメタリフェクワガーモンの右腕に噛み付いた。

『このっ、離れなさい。エミットブレイド』

メタリフェクワガーモンは、左手の指からレーザーを刃のように放出し、右腕に噛み付いたゲータモンを切り付ける。

『がはっ……言われんでも離れたるわ』

ゲータモンは噛み付いた顎を開けつつ、振り子の要領で自らの体

を捻り、メタリフェクワガーモンの右側で回転し、

『トレントテイル』

激流を纏った尻尾をメタリフェクワガーモンの側頭部に叩きつけた。

『グハッ……………』

『どやっ!』

メタリフェクワガーモンは吹っ飛ばされて奥のコンテナに叩きつけられた。ゲータモンは反動を使って、真治の横に着地する。

「お疲れさん」

『まだ終わつたらんやろ』

「せやな」

ゲータモンと軽く言葉を交わした後、真治は巧に話し掛けた。

「なあ、巧」

「ん、何だ」

「お前…………何をそんなに焦つとるんや?」

「えっ…………」

巧は虚を突かれた気分だった。何のことが検討も付かない様子だった。

「レーザー撃ってる奴…………メタリフェクワガーモンを探するときも俺の話の聞かんと飛んでつたやろ」

「まあ…………」

事実なので否定は出来ない。

「メタリフェクワガーモンもお前とヴルムモンだけで何とかしよう思たやろ」

「うっ…………」

全く考えてなかったと言われれば嘘になる。

「…………確かに、何や理由は知らんけど俺は浄化弾を撃てへんくなつた。けど、何も出来へん訳やない。俺は俺に出来ることをやる。せ

やから、お前も焦らんとお前らしくやったらええ。俺らをもうちよ  
い信頼してもええんちゃうか？」

「真治……」

確かに、巧は真治の悪核のことも相まって焦っていたようだった。

「そうかもな。……俺、焦ってたのでもないな。」

一度俯き、もう一度上がった巧の顔はどこか以前より晴れやかだ  
った。

「そっだよな。俺は俺らしく、俺のやるべきことを、俺のやれるだ  
け、俺のやりたいようにやるだけだ！」

巧がそう言い切った直後、その右手に持つD・トリガーが赤く輝  
いた。

「な、何だ。……くっ、うっ……」

右手のD・トリガーを見た直後、巧の頭の中に映像が流れ込み、  
少しよろめく。

「こ、これは……」

流れ込む映像では、自身が十年前に通っていた思い出の場所にい  
た。そこにいたのはオレンジ、黒、紺、と髪の色が見事にバラバラ  
な三人の子供だけだった。

（これは……俺が通ってた幼稚園！？ 何で？）

「たくみー、何だろあれー？」

三人のうちオレンジ色の髪の少女が巧に向かって話し掛ける。ど  
うやら、幼い巧の視点のようだ。

少女が指差す先には明らかに違和感のある園舎程の大きさの扉が  
あった。

その扉は巧には見覚えのあるものだった。

（あの扉は……大きさは違うけど、あのアイコンと同じ扉だ）

ギィイと音を立て、扉は開いていった。扉が開くと同時に中からまばゆい光が漏れて来る。

「うっ、何や……」

「あ、頭が……」

「ぼーっとして来るよー」

「うわっ……」

（この光は……）

四人の視界が光で埋め尽くされたとき、四人は気を失った。

光にのまれる寸前、巧は視界の端に、自分達を呆然と見つめる、そのときの自分達より少し小さい二人の金髪の子供を見た。

気を失ってから、再び目を開いたとき、四人は森の中にいた。

「おいっ……大丈夫かいな」

「えっ……ああ」

真治に呼びかけられ、巧は我に返った。

「メタリフェクワガーモンは？」

「えっ……今立ち上がったるところやけど。……お前がよろめいたから声掛けたんやけど」

「そうだったのか……」

（あの映像は一体……？）

どうやら、実際はほとんど時間が経ってなかったようだ。

『 貴方達、もう許しませんよっ！』

そうこうしているうちにメタリフェクワガーモンは立ち上がり、巧達の目の前に現れた。

『 巧っ！』

「ああ、分かっている。俺達がやるべきことをやりたいようにやるだけだ。行くぞ、グルムモン」

巧は赤く輝くD・トリガーをヴルムモンに向ける。

「これが俺達の力だ。超進化弾!!!」  
ハイパーエボリューションバレット

赤く輝くD・トリガーから撃ち出された深紅の弾を受けたヴルムモンは深紅の光に包まれた。

『ヴルムモン超進化』

光の中から現れたのは、肩から胸部に掛けてを深紅のアーマーで覆い、両肩にそれぞれ大砲を装備した竜だった。

三つの角とその中間点を結ぶ線をメタルフレームが覆い、両腕の肘から前も金属で覆われ、それに沿うようにして外側に三角形の刃を装備していた。

腕に付いていた翼は完全に背中から生え、メタルコーティングさ  
れていた。

『リントヴルムモン』

「リントヴルムモン。サイボーグ型、完全体。……って、完全体に  
進化しよったで!」

真治が驚きながら、D・トリガーから情報を読み取った。

『完全体に進化したから何です? 私の本気を見せましょう』

メタリフェクワガーモンは両手を前方に突き出し、

『最大出力です。ホーミングレーザー』

今までとは桁違いの速さでレーザーを撃ち出した。

『はあっ……はっ!』

数十発のレーザーは一瞬でドーム状に巧達を囲む。

『俺に任せろ』

リントヴルムモンは巧達もまとめて、その大きな翼で覆い隠した。  
(ゲータモンもぎりぎり入ったようだ)

『行きますよ!』

メタリフェクワガーモンの声と共に、大多数のレーザーがリントヴルムモンに襲い来る。

全てのレーザーが直撃し、辺りは閃光に包まれる。

『どうですか? 今までとは訳が違いますよ』

メタリフェクワガーモンが閃光の奥の敵に問い掛ける。

『なかなかだったか……』

『何っ……』

『俺には効かん!』

その問い掛けに応えるように、閃光を払うかの如くリントヴルムモンは翼を広げ、眼前の敵を見据えた。

『エミットブレイド』

『このっ』

メタリフェクワガーモンが両手からレーザーを刃状に出して切り掛かるのを、リントヴルムモンは両腕の刃で受け止める。

互いに一步も引かず、腕力というより体全体の力が拮抗した状態だった。

『負けてたまるかああ!』

が、リントヴルムモンがそう叫ぶと、両腕の刃とその両腕との境目辺りから炎が発生。瞬く間に炎は刃全体を包んだ。

『バーニングブレイド!』

『なっ……』

炎を纏った刃はレーザーの刃を押し切り、

『グハアアッ』

そのままメタリフェクワガーモンを切り付けた。

『まだだ!』

『くっ……』

斬られた勢いで軽く飛ばされたメタリフェクワガーモンに、さらにリントヴルムモンは両肩の大砲を向ける。

『クリムゾンメテオ』

大砲から放たれたのは二つの巨大な火炎球だった。

『ガッ……グハアアア』

火炎球が直撃したメタリフェクワガーモンは吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

『巧、頼むぞ』

『分かった』

巧はメタリフェクワガーモンのもとに駆け寄り、  
「浄化弾」

清らかな光を放つ弾を撃ち込んだ。

『すいませんでした。お陰で助かりました』

浄化弾により悪霧を払われたメタリフェクワガーモンは正気を取り戻したようだ。

「別に気にすんなって。それより、悪核……いや、なんか気色悪いゼリーみたいな奴を見なかったか?」

『はあ……あ、あれのことですね。あれに近づいてから私もおかしくなりましたから』

「どうやら悪核を知っているようだった。

「それが、どこにあるか分からへんか?」

『確か……この階には無かったと思います』

『そっか……』

『……すみません』

この地下には探し物は無いようで、巧達は落胆を隠せなかった。

「落ち込んでもしかあないし、上がるか。……って言っても、落ちてきた穴は閉じてもうたしな」

そう言っつて、真治は真上を見上げた。

『だったら、階段を使っつてはどうでしょうか？ この扉を抜けて真つすぐ行つた先にありますので』

そう言いながら、メタリフェクワガモンは扉横のパネルを操作し始めた。操作を終えてパネルから指を離すと同時に、扉がゴゴゴと重低音を響かせながら開いた。

『お前はどうするんだ？』

『私は別ルートから地下を抑えた後、中枢に潜り込もうと思います』

『そっか、じゃあな』

『御武運を』

そうして、巧達は扉を抜けて駆け出した。

「……なあ、ガビモン」

『何だ、巧？』

「……お前らが悪核の闇にのまれたとしても、俺達がその闇を払つて連れ戻してやる。良いな」

『……わーったわ』

もう、巧の目に迷いは無かった。

## 第十二話「紅蓮の機竜」（後書き）

完全体以降に進化しても、幼年期までに退化しない設定です。  
やっと完全体に進化したので、一応リオモンの進化系譜をまとめ  
てみます。

リオモン

成長期 小竜型 ワクチン種

必殺技

クリムゾンフレイム

バーニングネイル

ヴルムモン

成熟期 飛竜型 ワクチン種

必殺技

クリムゾンバースト

バーニンググライド

リントヴルムモン

完全体 サイボーグ型 ワクチン種

必殺技

クリムゾンメテオ

バーニングブレイド

???????

.....?

「.....」は後々どうなるか.....

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3295t/>

---

デジモンメモリーズ

2011年9月28日03時11分発行